

80年代日本のエコフェミニズム論争を総括する——
〈青木・上野論争〉の5つの争点をめぐって

要 約

筆者は 2022 年の論考「日本のエコフェミニズムの 40 年——第一波から第四波まで——」で日本のエコフェミニズムの 40 年の歴史を振り返り、下記の 4 つの波に腑分けしたことがある。

第一波（1983～1986 年）：イリイチ、フェミニスト人類学、そして上野・青木論争

第二波（1987～1994 年）：「失われた 10 年」を経て日欧女性交流事業「女性・環境・平和」へ

第三波（1995～2011.3.10）：実践的調査研究、男性研究者の参画、そしてエコフェミニスト文学批評とエコフェミニスト宗教学

第四波（2011.3.11～現在）：上野の反省、エコフェミニズム再考／再興、そして災害女性学

その後、2022-2023 年度にかけて（公財）アジア女性交流・研究フォーラム（KFAW）助成による本・客員研究員研究「日本のエコフェミニストの系譜学」を進める機会に恵まれた。それは第一波から第四波の内容を見直すと共に、新たに第一波以前の第 0 波（～1982 年）を措定する契機となった。本報告では、同研究を通じて大幅に見直した第一波に焦点を当てて報告する。

日本の第一波エコフェミニズムは〈青木・上野論争〉に代表される。同論争では、エコフェミニストの故・青木やよひと、当時、反-エコフェミニズムを掲げていた上野千鶴子が特に 1985 年に集中して学術誌やシンポジウム等で激突。結果として上野が勝利したような恰好となった学術的論争である。その後、エコフェミニズムは、2020 年代の今でも誤解された形で流通されてしまっており、一面的に、または不正確にしか理解されていない。

本論争については桜井裕子の 1990 年の優れた分析論文があるが、論争からわずか 5 年後に書かれたものに過ぎない。また最近では 2023 年の遠山日出也の論考があるが、本稿とは異なり、〈青木・上野論争〉を争点毎にまとめたものというよりは経緯や事実を 4 つの点にまとめたものである。本稿は、論争から約 40 年経った現在の学術的地平から〈青木・上野論争〉を言説・歴史・系譜学的に振り返りつつ 5 つの争点に総括し、^ひ延いては〈人新世〉という環境危機の現代においてエコフェミニズムの意義を再考することを目的とする。

本報告書の構成は以下の通り。第 1 章の「はじめに」に続く第 2 章では、〈青木・上野論争〉を振り返る際の導きの糸としてエコフェミニズムの系譜を確認する。特に、エコフェミニズムの小史とその各学派を提示することを目指す。第 3 章「〈青木・上野論争〉の経緯」では、1985 年 5 月の京都でのシンポジウムで天王山を迎えた〈青木・上

野論争)の前後の経緯を経時的に追う。第5章「おわりに」の前に据えられた本報告書の要となる第4章「〈青木・上野論争〉の提示した5つの争点」では、同論争が提示した以下の5つの争点を1つ1つ確認していく。

- ①【争点1：性差最大化論 vs. 性差最小化論——差異か平等か？】
- ②【争点2：母性主義 vs. 反母性主義——〈母性〉をめぐる「歴史的な論争」】
- ③【争点3：本質主義 vs. 構築主義——「フェミニズムによる自然からの逃走」？あるいは〈自然〉と〈自然〉の混同】
- ④【争点4：構造主義 vs. ポスト構造主義——構造主義的な慧眼の見落とし】
- ⑤【争点5：反近代主義 vs. 近代主義——創られた対立？】

争点1については、論争の中で青木は性差最大化論者 *maximizer*、上野は性差最小化論者 *minimizer* とみなされた。換言すれば青木は性に関して男女の差異を認める差異派、上野は平等派と位置付けられた、この点を探究している。争点2においては、青木は母性主義者、上野は反母性主義者と位置付けられた。青木のパートナーであった北沢方邦は、大正時代に平塚らいてうと与謝野晶子とのあいだで繰り広げられた「母性保護論争」に匹敵する、またはそれを超える〈母性〉をめぐる歴史的な論争となったと喝破している。争点3では青木は本質主義者に、上野は構築主義者とみなされた。学界では長きに渡って本質主義＝〈自然〉主義は劣勢に置かれ、あるいは否定され、構築主義が優位な時代が続いているが、別の角度から観ると上野の構築主義は「フェミニズムによる自然からの逃走」だったと看做すこともできる。また論争の中で〈自然〉と〈自然〉という〈自然〉の2つの意味が混同されていた可能性がある。

争点4では青木は構造主義者、上野はポスト構造主義者と位置付けられる。学界ではポスト構造主義が優勢な時代が続いているが、Charis Thompson が言うように、ポスト構造主義フェミニズムは、〈環境破壊〉と〈女性抑圧〉という社会の2つの傾向を連結させるエコフェミニズムがもたらした構造主義的な慧眼を見落としていた。争点5では青木は反近代主義者、上野は近代主義者に位置付けられるが、江原由美子が言うように、〈反近代主義 vs. 近代主義〉の二項対立自体が近代社会で構築された〈創られた対立〉であった可能性がある。以上のように〈青木・上野論争〉は、本報告以前に論じられ考えられている以上に幾重にも捻れた論争だったのである。

〈青木・上野論争〉の結果、日本で(も)エコフェミニズムの発展の可能性が阻害されてしまったのは残念なことであった。奇しくも2024年は、〈青木・上野論争〉から約40年、そしてフランソワーズ・デュボヌが〈エコフェミニズム〉を造語してから里程標となる50周年を迎える。〈人新世〉の今こそ、そして環境とジェンダーの両方の目標が盛り込まれたSDGsの時代の今こそ、〈青木・上野論争〉とエコフェミニズムの意義

を再考し、それを通じて日本はエコフェミニズムと幸福な再会を果たす——〈青木・上野論争〉を超克し、社会における環境的公正とジェンダー公正を並行して求める——、そのような時が到来していると確信している。

Abstract

In my 2022 article “40 Years of Ecofeminism in Japan: From the First to the Fourth Wave,” I reviewed the 40-year history of ecofeminism in Japan and divided it into the following four waves:

[First Wave] (1983-1986): Illich, Feminist Anthropology, and the Ueno-Aoki Debate

[Second Wave] (1987-1994): From the “Lost Decade” to the European Women’s Study Tour for Women’s Environmental Issues

[Third Wave] (1995-2011.3.10): Practical Research and Study, Participation of Male Researchers, and Ecofeminist Literary Criticism & Religious Studies

[Fourth Wave] (2011.3.11-present): Ueno’s Reflections, Reconsideration/Revival of Ecofeminism, and Disaster and Women’s Studies

Subsequently, I was given the opportunity to conduct a research project as a visiting researcher, entitled “A Genealogy of Japanese Ecofeminists,” funded by the Kitakyushu Forum on Asian Women (KFAW) during FY2022-2023. It was an opportunity to rethink the four waves, as well as to define the zeroth wave (-1982) preceding the first wave. This report focuses on the first wave, which was extensively reconsidered as part of the research.

The first wave of ecofeminism in Japan is represented by the Aoki-Ueno debate, in which the late ecofeminist Aoki Yayoi and Ueno Chizuko, who at the time held an anti-ecofeminist stance, clashed intensively in academic journals and a symposium, especially in 1985, an academic debate which resulted in Ueno’s victory. Even in the 2020s, ecofeminism continues to be misunderstood and represented to others in a misleading way, understood only one-sidedly or inaccurately.

Sakurai Yuko’s 1990 analysis of the debate is excellent but was written only five years after the culmination of the debate. More recently, Tooyama Hideya’s 2023 article summarizes the Aoki-Ueno debate in four points; unlike this report, however, it focuses on presenting a history and facts of the debate, rather than the points of contention. This report aims to reexamine the Aoki-Ueno debate from the current academic horizon—40 years after the debate—discursively, historically, and genealogically by distilling it into five points of contention and, by extension, reconsidering the significance of ecofeminism in the current environmental crisis of the “Anthropocene.”

The structure of this report is as follows: Chapter 1 provides an introduction. Chapter 2 defines the genealogy of ecofeminism as a guiding thread in reviewing the Aoki-Ueno debate; in particular, it aims to present a brief history of ecofeminism and its various schools. Chapter 3, “A History of the Aoki-Ueno Debate,” chronologically traces a history of the debate—before, during, and after, culminating in a symposium in May 1985 in Kyoto, Japan. Chapter 4, “The Five Points of Contention Raised by the Aoki-Ueno Debate,” before Chapter 5’s conclusion forms the core of this report, identifying the following five points presented by the debate:

- (1) Gender Maximization vs. Gender Minimization—Difference or Equality?
- (2) Maternalism vs. Anti-Maternalism: A “Historical Debate” Over “Motherhood”
- (3) Essentialism vs. Constructionism: “Feminist Flights From Nature”? Or Confusion Between “Nature” and “Naturalness”
- (4) Structuralism vs. Post-Structuralism: Losing Sight of the Structuralist Insight
- (5) Anti-Modernism vs. Modernism—An Invented Opposition?

Regarding Point 1, Aoki was regarded as a maximizer of gender differences, while Ueno was regarded as a minimizer. Point 1 explores the fact that Aoki was positioned as recognizing gender differences between men and women, while Ueno as advocating for equality. Point 2 looks at how Aoki was positioned as a maternalist and Ueno as an anti-maternalist. Aoki’s partner, Kitazawa Masakuni, considers the Aoki-Ueno debate as a historical debate over “motherhood” comparable to, or even surpassing, the “motherhood protection debate” between Hiratsuka Raicho and Yosano Akiko during the Taisho era (1912-1926). In Point 3 I address how Aoki was regarded as an essentialist and Ueno as a constructionist. In academia, essentialism (also known as “naturism”) has long been considered inferior or denied, and constructionism has continued to prevail. From another angle, however, Ueno’s constructionism can be seen as “feminist flights from nature.” It is also possible that the two meanings of “nature”—“nature” versus “naturalness”—were confused in the debate.

Point 4 positions Aoki as a structuralist and Ueno as a post-structuralist. Although post-structuralism continues to prevail in academia, as Charis Thompson notes, post-structuralist feminism lost sight of the structuralist insight brought by ecofeminism in linking the social trends of environmental destruction and women’s

oppression. Point 5 positions Aoki as an anti-modernist and Ueno as a modernist. That being said, as Ehara Yumiko posits, the “anti-modernism vs. modernism” dichotomy may *per se* have been an “invented opposition” constructed by modern society. As described above, the Aoki-Ueno debate in fact produced many more twists and turns than have been previously discussed or considered.

It is unfortunate that the Aoki-Ueno debate has muted the potential for the development of ecofeminism in Japan. Coincidentally, the year 2024 marks nearly 40 years since the Aoki-Ueno debate, as well as the 50th anniversary of Françoise d’Eaubonne’s coining of the term *ecofeminism*. Now is the time to reconsider the Aoki-Ueno debate and the significance of ecofeminism in the age of the Anthropocene and SDGs, the latter of which includes both environmental and gender goals. Through this process, Japan will have a happy reunion with ecofeminism. I am convinced that the time has come for Japan to move past the Aoki-Ueno debate, and seek for both the environmental and gender justice simultaneously in society.

【目次】

第1章	はじめに.....	8
第2章	エコフェミニズムの系譜.....	9
第1節	エコフェミニズム小史.....	9
第2節	エコフェミニズムの各派.....	11
第3章	〈青木・上野論争〉の経緯.....	16
第4章	〈青木・上野論争〉の提示した5つの争点.....	21
第5章	おわりに.....	32

第1章 はじめに

筆者は2022年に「日本のエコフェミニズムの40年——第一波から第四波まで——」（森田, 2022c）という論考を発表した。同論文では日本のエコフェミニズムの40年の歴史を振り返り、下記のように4つの波に腑分けした。

第一波（1983～1986年）：イリイチ、フェミニスト人類学、そして上野・青木論争

第二波（1987～1994年）：「失われた10年」を経て日欧女性交流事業「女性・環境・平和」へ

第三波（1995～2011.3.10）：実践的調査研究、男性研究者の参画、そしてエコフェミニスト文学批評とエコフェミニスト宗教学

第四波（2011.3.11～現在）：上野の反省、エコフェミニズム再考／再興、そして災害女性学

その後、2022-2023年度にかけて（公財）アジア女性交流・研究フォーラム（KFAW）助成による本・客員研究員研究「日本のエコフェミニストの系譜学」を進める機会に恵まれた。それは第一波から第四波の内容を見直すと共に、新たに第一波以前の第0波（～1982年）を措定する契機となった。本報告では、同研究を通じて大幅に見直した第一波に焦点を当てて報告する。

日本の第一波エコフェミニズムは〈青木・上野論争〉に代表される。同論争ではエコフェミニストの故・青木やよひと、当時、反-エコフェミニズムを掲げていた上野千鶴子^①が特に1985年に集中して学術誌やシンポジウム等で激突。結果として上野が「圧勝」（千田, 2009, p. 108）したような恰好となった学術的論争である。その後、エコフェミニズムは、現在でも誤解された形で流通・理解されてしまっている。日本で「数奇な運命を辿ってきた」（森田, 2022d, p. 220）エコフェミニズムは、1990年代半ばの時点で「より自然に近い存在としての女性の持っている特性が、現代社会の中では発揮されにくいようになっている、という批判」（瀬地山, 1994, p. 193）をする思想と、また2010年代に入っても「イルカクジラに入れあげておかしいことになっている女だとか、草木染系[の服を着ている女性]と地続き」（上野・湯山, 2012, p. 83 [湯山玲子の発言]）と、そして2020年代に入っても「女性を『資本主義の外』に置き、そこに理想化された社会の可能性を観る論」（江原, 2021, p. 33）などと一面的に、または不正確にしか理解されていない。

本論争については桜井裕子（1990）の優れた分析論文「エコロジカル・フェミニズム論争は終わったか」があるが、論争からわずか5年後に書かれたものに過ぎない。また最近では遠山日出也の論考（2023, p. 49）があるが、本稿とは異なり、〈青木・上野論争〉を争点毎にまとめたものというよりは経緯を4つの点にまとめたものである。本稿

は、論争から約 40 年経った現在の学術的地平から〈青木・上野論争〉を言説・歴史・系譜学的に振り返りつつ 5 つの争点に総括し、延いては〈人新世〉という環境危機の現代においてエコフェミニズムの意義を再考することを目的とする。

本題に入る前に、〈青木・上野論争〉を振り返る際の導きの糸として第 2 章ではエコフェミニズムの系譜を拙稿（森田, 2022b, 2022c）を土台に確認したい。日本では同論争の影響もあり、世界の多様なエコフェミニズムの展開があまり知られていないためである。特に、エコフェミニズムの小史と各学派を提示することを目指す。

第 2 章 エコフェミニズムの系譜

第 1 節 エコフェミニズム小史

〈エコフェミニズム〉という言葉は 1974 年、フランス人フェミニストのフランソワーズ・デュボンヌによる著書『Le Féminisme ou la Mort (Feminism or Death ; フェミニズムか死か)』（d'Eaubonne, 2022[1974]）の中で誕生した。エコフェミニズムは、フェミニズム内で「第三波フェミニズム⁽²⁾」（Eaton & Lorentzen, 2003 ; 萩原, 2001 ; Plumwood, 1993）として、またポストフェミニズムの一派（Gifford, 1995）としても位置付けられる。デュボンヌ（d'Eaubonne (2022[1974]) はエコフェミニズムの展望として、「地球は男性性から引き離され、[中略] 女性性の中に置かれることであらゆるもののために花開くだろう」（pp. 221-222）と言明した。またその約 25 年後には、「唯一、エコフェミニズムだけが家父長制の終焉を可能にし、社会を環境破壊から救うだろう」（d'Eaubonne, 2000, pp. 183-184）とまで喝破している。しかしデュボンヌ以降、エコフェミニズムはアメリカでより花開くこととなった（Merchant, 2007）。実際、デュボンヌが「エコフェミニズム」を造語した 1974 年には、アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校で「女性と環境会議（Women and Environment Conference）」が開催されている。

本稿では〈エコフェミニズム〉の語を使用しているが、この語は〈エコロジカル・フェミニズム ecological feminism〉や〈環境フェミニズム environmental feminism〉とも称される。また略称としては〈エコフェミ〉の語が使われている。「フェミニズムは自然と人間外存在の利害を真剣に捉えてこなかった」（p. 53）と分析する Chris J. Cuomo (1998) は、「エコフェミニズム」と「エコロジカル・フェミニズム」とを明確に分節する。前者は女性と自然を本質的に女性的なものとして捉え、後者は女性と自然は女性的なものとして構築されている、と定義する。一方、アメリカのエコフェミニズム研究を牽引してきた 1 人である Greta Gaard (2017, p. xxvi) は、前者を文化的・ラディカル・反種差別主義的 antispeciesist な思想、後者を哲学的な思想、と分類している。その他、同義のラベルには〈フェミニスト環境主義 feminist environmentalism〉や〈ジェンダーと環境 gender and the environment〉などがあるが、〈エコフェミニズム〉の

代わりのこのような代替語を使うのは（後述するように日本でも）本質主義と紐づけられてしまった〈エコフェミニズム〉という語の使用を避けるため、が理由の1つとして挙げられている（Gaard, 2011, p. 27）。また〈エコフェミニズム〉のように1語にしてしまうと「エコ」と「フェミニズム」の必然的な繋がりが示唆されてしまうため、両者の繋がりを問い続ける意味で中黒「・」で2つの語を繋いだ〈エコロジカル・フェミニズム〉の語を敢えて使う者もいる^③。

Gaard (1993) は、「エコフェミニズムはあらゆる抑圧形態に終止符が打たれることを求め、女性（または他のすべての被抑圧集団）を解放するためには、自然を等しく解放することなしには成功しない、と主張する」（p. 1）思想だとまとめる。Val Plumwood (1993) も、エコフェミニズムの古典となった著書『Feminism and the Mastery of Nature』で、それまでの三大分析変数である〈ジェンダー〉〈人種〉〈階級〉の三位一体に〈自然〉（p. 1）あるいは〈種 species〉（p. 5）といった〈人間外存在〉の変数を加え、4つの変数領域における解放を唱えているし、渡久山晴美・渡久山幸功（2013）も「人間以外の動植物も含めたあらゆる種類の支配構造の被抑圧者へのエンパワーメントの可能性を秘める」（p. 175）とエコフェミニズムを定義し、射程に人間外存在 non-human を含めることで、人間中心主義に陥りがちな従来のフェミニズム（森田, 2022b）を超克する。

萩原（2007, 2015）と Eaton & Lorentzen（2003）の主張を総合すると、エコフェミニズムの主眼は以下の6点にまとめられる。

- ①女性と自然は概念・象徴的に結び付けられている
- ②自然災害や環境破壊の影響にジェンダー差がある
- ③環境問題解決の手段や方法にジェンダー差がある
- ④環境問題解決のための政策や意思決定の影響にジェンダー差がある
- ⑤女性は環境に関する知識・専門性が高い可能性がある
- ⑥環境運動・政治への参画の程度にジェンダー差がある

そしてこのように環境問題においてジェンダー差が生じている原因としては、「家父長制」（d'Eaubonne, 2000）、「資本主義」（イリイチ, 1984[1983]; アルツァ他, 2020[2018]）、「支配モデル」（Plumwood, 1993）、「出産機能・再生産」（Ortner, 1974）^④、男性／女性、文化／自然、精神／身体といった二元論（横山, 2008）などが各論者によって挙げられている。

エコフェミニズムは、フェミニズムの側（e.g., 馬場, 1993）からも環境研究者の側（e.g., 加藤, 1995）からも「環境問題を利用している」と批判されてきた。しかしエコフェミニズムの思想は「身近な環境問題から地球環境問題全般、原発問題、有害物質に

よる自然環境の汚染と身体破壊、人口問題、生殖技術、そして新しい政治経済、社会のあり方まで広い範囲にわたる」(萩原, 2006, p. 53) のであり、ヒエラルキーと環境破壊のない新たな社会というビジョンの構築を目指す(マーチャント, 1994[1992])、環境的公正とジェンダー公正を並行して求める思想である。

第2節 エコフェミニズムの各派

エコロジー運動やフェミニズム同様、エコフェミニズムも一枚岩ではない。アメリカの著名なエコフェミニストであるキャロリン・マーチャント(1994[1992])は、著書『ラディカルエコロジー—住みよい世界を求めて』の中でエコフェミニズムを以下の四類型に分けている。

- ①リベラル・エコフェミニズム
- ②カルチュラル・エコフェミニズム
- ③ソーシャル・エコフェミニズム
- ④ソーシャリスト・エコフェミニズム

以下、1つ1つ、見ていきたい。

①の「リベラル・エコフェミニズム」は「自然と人間の関係を現存の統治機構の内部から新しい法律や規制を成立させることによって変えようとする」(p. 250) ことを目的とする。換言すれば、リベラル・エコフェミニズムは、現状の資本主義等の体制を維持しつつ環境問題解決とジェンダー平等の双方の達成を目指すのであり、その意味で近代主義的である。

②の「カルチュラル・エコフェミニズム」は、「文化派エコフェミニズム」とも翻訳できるが、その目指すところは「女と自然の地位を高め、解放すること」(p. 259) にあり、次のように思想する。

多くのカルチュラル・[エコ]フェミニストは先史時代を称賛する。先史時代には
[中略] 女たちは生命を生み出す者として大いに尊敬されていた。しかしながら、
家父長制文化の出現によって母なる女神は王座から引き下ろされ、男性の神に取
って代わられた。女性の神々は従属的な地位におかれることになった。(p. 259)

しばしば反科学、反技術の観点から、カルチュラル・エコフェミニストは女神崇拝、
月、動物、そして女性の生殖器官を中心とした古代の儀礼を復活させることにより、
女と自然の関係性を讃える。(p. 260)

この最後の「女と自然の関係性」について、例えば文化人類学者の Sherry Beth Ortner (1974) は、構造主義的の図式を使えば [女性 : 男性 : : 自然 : 文化] (=女性と男性との関係は自然と文化との関係と等しい、と読む) という図式 (“オートナー図式”) を打ち立てた上で、この図式の中で女性ほどちらかと言うと自然と文化の中間的な位置を占めていると主張、女性の自然への近接性を説いた。このような主張に対してフェミニスト人類学者は、女性-自然の繋がりや女性の劣位の脱構築を試みた。その 1 人である Marilyn Strathern (1980) は、パプアニューギニアのハーゲン社会ではそもそも文化 / 自然という二項対立はないことに加え、男性-自然の繋がりを発見している⁽⁵⁾。

なお、Starhawk (1989) に代表されるような「スピリチュアル・エコフェミニズム」はこのカルチュラル・エコフェミニズムに近い思想的位置付けである⁽⁶⁾。いずれにしても、カルチュラル・エコフェミニズムの前近代主義的で、女性性を賛美し、〈本質主義〉と捉えられがちな男 / 女の二項対立を保持する性差最大化 maximalist 思考は、フェミニズム内でも批判的的となってきた。

③のソーシャル・エコフェミニズムは、マレイ・ブックチン (ブックチン) が創始者であるソーシャル・エコロジー (e.g., ブクチン, 1996[1990]) のエコフェミニズム版である。ブックチンの思想と同様、無政府主義的である (Mellor, 1997, p. 45)。ソーシャル・エコロジーは、人間による自然支配と人間による人間支配は同根であり、これら 2 つの支配形態を終焉に向かわせることが肝要、と主張したが、その主張をベースとするソーシャル・エコフェミニズムは次のように思想する。

ソーシャル・エコフェミニズムは、経済的・社会的な位階制を打倒することによって女を解放すると主張する。この位階制は生の全ての側面を、今日では子宮さえ侵している市場的な社会関係に変えてしまう。(マーチャント, 1994[1992], p. 265)

ソーシャル・エコフェミニズムは、資本主義や家父長制を含め、現状の体制の転覆を目指す、という意味で脱近代主義的である。

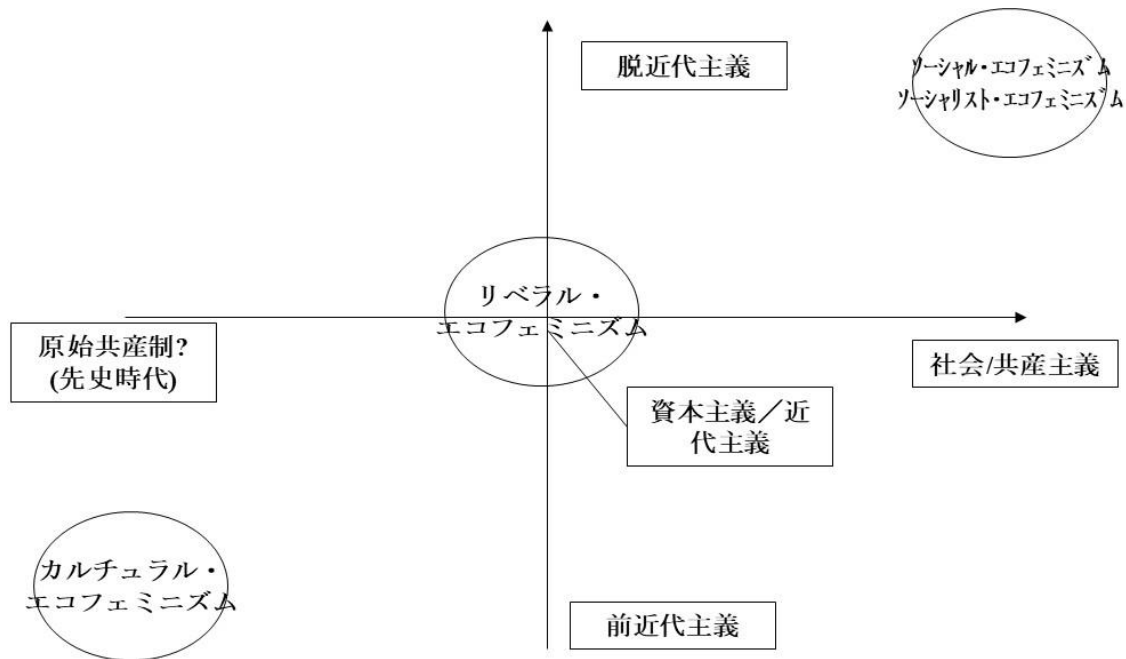
最後の④はソーシャリスト・エコフェミニズムである。ソーシャリスト・エコフェミニズムはソーシャリスト・エコロジー (e.g., オコンナー, 1995[1991]) のフェミニズム版と言ってよく、マーチャント (1994[1992]) はその主張を以下のようにまとめる。

資本主義的家父長制の批判を提出 [し] [中略]、生産と再生産、生産とエコロジーの間の弁証法的対立関係に焦点を合わせる。ソーシャリスト・エコフェミニズムの全体的視野から社会的でエコロジカルな変化を分析し、生の持続可能性と公正な社会に通ずる社会的行動を提案する (p. 267)

ソーシャル・エコフェミニズムと同様、ソーシャリスト・エコフェミニズムも、資本主義や家父長制といった現状の体制の転覆を目指す、という意味で脱近代主義的である。なお、ソーシャル・エコフェミニズムとソーシャリスト・エコフェミニズムの区別は、後者はより資本主義と家父長制のみに焦点を当てはするが (Nhanenge, 2011, pp. 103-104)、違いはそれほど明確ではなく、事実、マーチャントも両者をほぼ同じものとして記述している場面 (pp. 250-251) もある。

上記に基づき、マーチャントの四類型を四象限を使って図式化すると図 1 のようになる。

図1 「マーチャントの四類型の図式化」



上述の通り、マーチャントはエコフェミニズムを四類型化した。異なる類型化を試みた者も少なからず存在する。John Barry (1999) は「本質主義的エコフェミニズム」「唯物論的エコフェミニズム」「抵抗的エコフェミニズム」の3つに類型化する。マーチャントの類型化に照らし合わせると「本質主義的エコフェミニズム」はカルチュラル・エコフェミニズムに、「唯物論的エコフェミニズム」はソーシャリスト・エコフェミニズムに近く、「抵抗的エコフェミニズム」は「本質主義的エコフェミニズム」と「唯物論的エコフェミニズム」の折衷的な位置付けである。また武田一博 (2005) はカルチュラル・エコフェミニズムやスピリチュアル・エコフェミニズムを包含する「神秘主義エコフェミニズム」とソーシャル・エコフェミニズムを包含する「社会的エコフェミニズム」の2つに大別している。横山道史 (2007) は、二元論を問題視する「脱構築的エコフェミニズム」と資本主義的家父長制を問題視する「社会主義エコフェミニズム」の2つに大別する。また Mary Mellor (2000) はカルチュラル・エコフェミニズムに近い「親和性エコフェミニズム⁽⁷⁾」と「ソーシャル/ソーシャリスト・エコフェミニズム」の2つに大別している。Dorceta E. Taylor (1997) はカルチュラル・エコフェミニズムに近い「ラディカル・エコフェミニズム」と「ソーシャリスト・エコフェミニズム」の2つに分類する。

上述したエコフェミニズムの各分類をマーチャントの四類型を基軸として名称に基づき整理すると表1のようになる。

表1 「マーチャントの四類型を基軸としたエコフェミニズム各派の位置付け」

マーチャント (1994[1992])	リベラル・ エコフェ ミニズム	カルチュ ラル・ エコフェ ミニズム	ソーシャ ル・ エコフェ ミニズム	ソーシャ リスト・ エコフェ ミニズム		
Barry (1999)		本質主義 的エコフ ェミニズ ム		唯物論的 エコフェ ミニズム	抵抗的 エコフ ェミニ ズム	
武田 (2005)		神秘主義 エコフェ ミニズム	社会的エ コフェミ ニズム			
横山 (2007)				社会主義 エコフェ ミニズム		脱構築 的エコ フェミ ニズム
Mellor (2000)		親和性エ コフェミ ニズム	ソーシャル/ソーシ ヤリスト・エコフェ ミニズム			
Taylor (1997)		ラディカ ル・エコ フェミニ ズム		ソーシャ リスト・ エコフェ ミニズム		

出典：森田（2022a）を一部改稿

他にも、微分化された多様性に彩られたエコフェミニズムが登場している。ユダヤ人という民族性を前景化した「ユダヤ人エコフェミニズム」(Diamond & Seidenberg, 1999)、セクシュアリティ(クィア、LGBT+)を前景化した「クィア・エコフェミニズム」(Gaard, 1997)、〈食〉を前景化した「ベジタリアン・エコフェミニズム」(Gaard, 2002)、種の多様性を前景化した「マルチスピーシーズ・エコフェミニズム」(Power, 2016)、また「人新世エコフェミニズム」「批判的物質的エコフェミニズム」「ポストヒューマニスト・ポストコロニアル・エコフェミニズム」(Gaard, 2017)などもある。ブライドッチ他(1999[1994])が喝破するように、「エコ・フェミニストの数だけ多くのエコ・フェミニズムがあるのだ」(p. 295)。しかし横山(2008, p. 80)も述懐するよう

に、日本では主にマーチャントの四類型が一人歩きしてしまい（ちなみに四類型もそれほど知られている訳ではない）、上述のような多様なエコフェミニズム各派の存在はほとんど知られてない⁸⁾。一方で、上記の表のように“各派”を明確に区別することは難しく、したがって微分化自体が無用だと主張する者（e.g., Mellor, 1997, p. 46）もいることは附記しておきたい。

ここまで主に、海外の状況・文献に基づいた、言わばエコフェミニズムの概論を提示してきた。次章では、1980年代日本のエコフェミニズム論争として知られる〈青木・上野論争〉のまずは経緯を振り返りたい。

第3章 〈青木・上野論争〉の経緯

日本のエコフェミニズムは、青木が編んだ『シリーズ プラグを抜く3 フェミニズムの宇宙』が出版された1983年に始まったと言ってよい。同書には青木（1983）の論文「女性性と身体のエコロジー」に加え、〈エコフェミニズム〉の語を造語したドオボンヌ（デュボンヌ）（1983[1976]）の小論「エコロジーとフェミニズム」も収録されている。実際、上野（1986b[1984], p. 82）も日本でエコフェミニズムが宣言されたのは青木の上記の編著としているし、桜井（1990）も「一九八三年に青木やよひによって提唱されたエコロジカル・フェミニズム」（p. 120）と述べている。江原由美子（1985, p. 5）も然り、である。

青木やよひ（1994c[1985]）は〈青木流エコフェミニズム〉と称してよい程度に、第2章で確認したような主流のエコフェミニズムからは逸脱した独自のエコフェミニズムを構想した。まず「文明化＝自然の抑圧＝身体性の疎外＝性の蔑視⁹⁾」（p. 58）という青木が「近代の命題」を呼ぶものを措定し、現代文明が自然と女性を疎外していることを示しつつ、「フェミニズムの側からこそ、古い枠組みを打ち破って、文明の質を問いなおす大胆な作業が必要」（p. 66）と述べる。「エコロジカル・フェミニズム [は] [中略] 男性原理のみで塗りがためられた現代のコンクリート・ジャングルに、女性原理によって突破口をうがとうとする文化革命の一つなのである」（青木, 1994e[1985], p. 205）と訴え、文明化によって疎外された『女性原理』の復権」（青木, 1994b[1985], p. 231）を主張した。青木は一般読者向けの小論で〈青木流エコフェミニズム〉を以下のように分かりやすく説明している。「エコロジカル・フェミニズム [中略] は、女性がこれまで担ってきた生活者としての感覚と、マイナス記号化されていたみずからの女性性を、プラスに転換 [し] [中略]、より少なく働き少なく消費しながら脱産業社会的な別の豊かさを実現しようとするものである」（青木, 1984, p. 4 [強調引用者]）、と。

また青木は、エコフェミニズムは「今世紀 [20世紀] のもっとも大きな革命となることは疑いない」（青木, 1983, p. 295）と言い切り、もし「エコロジーとフェミニズムが切り離されて、それぞれ体制に回収されれば、その力は失われ、これまでのさまざまな

変革の試みと同じ運命をたどることになる」(p. 295)とまで述べる。生活の見直しを掲げたエコロジストの「暮らしはすぐれて政治的だ」という主張と、フェミニズムの「個人的なことは政治的なこと」という主張は重なり合い、「私〔青木〕はエコロジーとフェミニズムは、どちらを欠いても人間のよりよい未来に貢献しえないと信ずることができた」(青木, 2003a, p. 328)という確信が青木流エコフェミニズムの核心にある。

この独自の青木流エコフェミニズムは、〈青木・上野論争〉の中で〈イヴァン・イリイチ流エコフェミニズム〉と同一視され、青木は『『エコロジカル・フェミニズム』に代表されるイリイチ派フェミニスト⁽¹⁰⁾』(上野, 1985b, p. 80)と括られてしまう。上野と青木は1985年に『現代思想』上で、具体的には上野(1985b)は1月号でイリイチ＝青木批判、つまり『『エコロジカル・フェミニズム』への批判』(p. 126)を展開、一方の青木(1994b[1985])は4月号で応答し、それぞれ論陣を張っている。上野が青木をイリイチ派と同定したのがこの「1月号」で、上野は「イリイチ派フェミニスト」(＝青木)を「イリイチという罫から救い出し」(p. 81)たいとした。しかし当時の青木(1994b[1985])は「[イリイチ著の]『ジェンダー』さえまだ精読していない」(p. 235)状況であり、「だいたい私のジェンダー概念は、イリイチさんに影響を受けたわけではなく、まったくちがうもの」(新評論編集部, 1986, p. 174)だったのである。上野は論争の約25年後に「相手〔青木〕の仕事に敬意を持っているから、全力をあげて批判」(西川・上野・荻野, 2011, p. 107)したと述べているが、青木(2003a)は論争の約20年後に、上述の論争当時の上野の同定を「まったくの誤りである[り]」「このような物言いは、思想家としてのイリイチへの人格的誹謗であり、私の人格をも傷つけるものである」(p. 328)と怒りを表明している。

イリイチ(1984[1983])は物議を醸し、アメリカのフェミニストや上野から攻撃を受けた著書『ジェンダー——女と男の世界』で、ジェンダー(＝社会的文化的性差)／セックス(＝生物学的性差)というジェンダー研究における慣例的な分類とは異なる形で、前近代的な「ヴァナキュラーな〈ジェンダー〉」と近代的な「経済を媒介とする〈セックス〉」の2つを対立する概念として提示した。そして前者を、非対称ではあるが男女が相互補完的であった前近代の関係性として理想化した。この“倒錯”具合については、萩原弘子(1988[1985])が「周到な詐術に満ちた倒錯の書」(p. 70)として完膚なきまで批判している。しかしイリイチ流エコフェミニズム(ジェンダー論)は一時、日本で大変流通した。その理由を江原由美子(1985)は次のように分析している。

イリイチのジェンダー論はアメリカのフェミニストからは総攻撃を受けた⁽¹¹⁾にもかかわらず、日本においては広範に受容された。それはイリイチの所説の中に、産業社会に対する反感、「男並み」志向のフェミニズムに対する反感、「性の解放」に対する反感等を嗅ぎつけることができるからであり、それが日本における女性解放

論が伝統的に持っている共同体志向、反近代主義的傾向、反個人主義的傾向に合致したためだと思われる。(p. 22 [強調引用者])

ではなぜ青木はイリイチ派と同定されてしまったのだろうか？

確かに青木は1982年4月23日には〈フォーラム・人類の希望〉主催のシンポジウム「いま、反核と平和の根拠を問う」の討論三「シャドウ・ワークをめぐる」でイリイチと同席しているし(能澤・鶴見, 1999, p. 401)、1985年10月14日のシンポジウム「ジェンダー喪失の歴史—I・イリイチ、B・ドゥーデンを囲んで—」でもイリイチと同席している(新評論編集部, 1986)。このようにイリイチと行動を共にすることがあったことが1点目として挙げられる。

2点目は、青木(1983)は「天なる父と母なる大地」という宇宙観に基づいた雌雄性の分類を〈ジェンダー〉と名付け、その文化的・宇宙論的な性別＝〈ジェンダー〉を身体的な性から区別する。そして青木(1987a[1982], pp. 6-7)は、イリイチの「ヴァナキュラーな〈ジェンダー〉」からは差別化しつつ、自身は1971年にアメリカ先住民のナバホ族が天地万物のすべてを性別化していることを知り、宇宙論に基づく〈ジェンダー〉の思想を構築したとしている。宇宙論やナバホ族の実践は必ずしも前近代的とは限らないが、前近代性と結び付けられることが多く、ここにも青木と前近代志向のイリイチが同定された原因があったのではなかろうか。

3点目は、2点目と関連するが、青木流エコフェミニズムは、第2章で確認したマーチャント(1994[1992])の分類から言えばカルチュラル・エコフェミニズム流の主張であった。同じくカルチュラル・エコフェミニズム流の思想を提示したイリイチとの類似性がゆえに青木はイリイチに同定されてしまった可能性である。なお、青木流のカルチュラル・エコフェミニズムもイリイチ流のカルチュラル・エコフェミニズムもカルチュラル・エコフェミニズムを代表する思想では決してなく、2人の独自の構想に基づいている。

4点目として、青木の難解な文章、また論考毎に主張がややブレている事実を追加しておいてもよい。例えば青木(1979, pp. 4-5)は、1979年の論考で性差を【①】生物学的(第一次)性差、【②】①が発展・強化された社会的(第二次)性差、【③】①と②に根ざしてはいるもののそれらとはほぼ無関係に人為的に仕上げられた文化的(第三次)性差、の3つに分類しているが、その3つの分類が、上記2点目における文化的・宇宙論的な性別＝〈ジェンダー〉と身体的な性の2分類とどのように符号しているのか分かりにくい(おそらく③が文化的・宇宙論的な性別＝〈ジェンダー〉に、①②が身体的な性に一致していると考えられる)。大越愛子(1991)も「青木氏の[文章に見られるような]形而上学的体質が、日本においてエコ・フェミを分かりにくい、問題の多いものとするのに一役買った」(p. 91)と分析している。形而上学的学術用語がふんだんに散

りばめられた青木の難解な文章が誤解を生み、異なるが類似点もあるイリイチの思想と
同定されてしまった可能性もある。

青木とイリイチの思想を同定・混同することがなかった——少なくとも以下の引用に
おいては——のが江原由美子である。江原（1985）は、「エコロジカル・フェミニストの
立場に立つ青木氏等 [中略] エコロジカル・フェミニストの主張にもそれなりに積極的
な側面があることは否定すまい」としつつ、「イリイチの所説は前近代的共同体を『解
放イメージ』として志向するエコロジカル・フェミニストとは別である」（p. 24）と述
べる。次章の争点 5 で叙述するように、青木を「前近代志向」と同等視している点には
疑問が残るが、青木とイリイチとを同等視していない点では評価できる。

前述の上野と青木の『現代思想』上での応酬の後、〈青木・上野論争〉がクライマッ
クスを迎えたのが、1985 年 5 月 12 日に京都で日本女性学研究会の例会として開催さ
れたシンポジウム「フェミニズムはどこへゆく——女性原理とエコロジー——」であつた。
本シンポジウムでは、上野曰く「東京のご自宅まで伺って [招聘を] お願いし」（西川・
上野・荻野, 2011, p. 106）た青木（1985）が講演を行った後、上野（1985a）を含むパ
ネリストが応答、パネル・ディスカッションを行っている（日本女性学研究会一九八五
年五月シンポジウム企画集団, 1985）。西川祐子の回想によると同シンポジウムでは上
野が「青木を怒らせた」（西川・上野・荻野, 2011, p. 105）一方で、全体的には男性(原
理)／女性(原理)の二元論を否定しない青木は性差最大化論者 *maximalist*、上野はその
対極にある性差を縮小する性差最小化論者 *minimalist* という見方が根付いた。また江
原（1990, p. 31）が言うように、青木は「文明観の転換」「価値観の転換」を優先課題
とするが、上野の方は「性別役割分業の廃絶」「現実の力関係の変革」を優先課題とし
ていたことが浮き彫りとなった。

しかし一方で、両者には共通点も多いことがシンポジウムを通じて明らかになる。

「激突！」が期待されたそのシンポジウムで両者が気づいたのは、お互いの食い違
いは「女性原理」という言葉を使うか否かという用語上の問題にすぎず（もちろん
それもとるに足らない問題ではないけれども）、何を憤りどんな世の中を作りたい
のかというイメージは意外なほど共有していることだった。（落合, 1987, p. 234）

「女性原理」という言葉は、当時のアカデミアでの流行語であつた。例えば「女性原理」
をめぐる青木とも対談（中村・青木, 1986）をしている中村雄二郎（2001[1982]）、同
じく青木と「女性原理」について対談している河合隼雄（河合・青木, 1986）、また宮迫
千鶴⁽¹²⁾（1984）らも「女性原理」に関して発信をしていた。また 1983 年 8 月号の『現
代思想』でも「女性原理」の特集が生まれ、中村と河合が「原理としての女性」という
対談を行っている（中村・河合, 1983）。青木自身（1985, p. 26）はボーヴォワールの

『第二の性』で初めて「男性原理」という言葉に触れたとし、その対立概念として「女性原理」を捉えている。

前近代の非対称ではあるが男女の相互補完的な関係を論じるイリイチのジェンダー論は「前近代の美化」(戸田, 1994, p. 295)と批判されるようになり、上述したように青木はイリイチ(派)と同一視され、論争では上野が青木を「こてんぱんにやっつけた」(西川・上野・荻野, 2011, p. 106 [上野の発言])結果、「圧勝」(千田, 2009, p. 108)した恰好となってしまった。その結果、青木は論壇から締め出される結末となった。青木の生涯に渡るパートナーであった北沢方邦は当時の様子を次のように回顧している。

1985年の歴史的な青木・上野論争で、マス・メディアやその女性記者のほとんど、また多くの論壇時評などが上野千鶴子氏の近代フェミニズムを支持し、青木のエコロジカル・フェミニズムに批判的 [中略] であったため、青木はメディアや自治体の文化活動から急速に閉めだされるにいたった。(北沢, n.d.a [強調引用者])

青木自身(2003b)も「その後の私は、“イリイチ派フェミニスト”“母性主義者”などのラベルを貼られたまま、急速に発言の場を失った」(p. 54)と約20年後に振り返っている⁽¹³⁾。

上述の1985年5月のシンポジウムの後、上野(1986c)は、1985年10月23～25日にかけて東京で開催されたシンポジウム「女は世界をどう変えるか」の第三議題「女性原理と男性原理」でイリイチと同席、共に基調報告をし“直接対決”している。その中で、(カルチュラル・)エコフェミニズム的思考は男性原理的な軌道を修正する過渡期の戦略としては効果的だが、長期的にはジェンダー役割の固定に繋がると主張した。1990年代に入っても上野(1995)はイリイチ批判を続けており、「フェミニズムの成果をかすめとって、換骨奪胎し」(p. 117)、「産業社会以前のジェンダー関係を、調和的なものとしてロマン化しようとした」(p. 118)と強く糾弾している。

当時、青木以外にもマーチャント(1985[1980])による『自然の死—科学革命と女・エコロジー』の邦訳が発刊され、また足立真理子(1986)や清水和子(1986)といったフェミニストたちからエコフェミニズムに期待を寄せる声があった。しかし(青木・上野論争)は、青木の主張は書籍『フェミニズムとエコロジー』として、上野の主張は「イリイチ批判として」(上野・千田・白川・丹波, 2012, p. 29 [上野の発言])「エコ・フェミニズムを掲げた人々を批判して書いた」(上野, 2013, p. 107)書籍である『女は世界を救えるか』として、それぞれ1986年に出版されることで終止符が打たれた。

〈青木・上野論争〉では「エコ・フェミを批判する者たちは、この地球的危機に対して、何ら答えようとしていな [かった]」(桜井, 1990, p. 121)論争であった。その結果、「フェミニズムがどのようにエコロジーにかかわっていけばいいのか、その回路までが

閉じられた感があるのは、残念なこと」（千田, 2009, p. 108）であり、それはまさに「エコロジーとフェミニズムの不幸な結婚」（萩原, 2001, p. 56）だったのである。結果として、1990年代半ばの時点で「より自然に近い存在としての女性の持っている特性が、現代社会の中では発揮されにくいようになっている、という批判」（瀬地山, 1994, p. 193）をする思想と、また2010年代に入っても「イルカクジラに入れあげておかしいことになっている女だとか、草木染系〔の服を着ている女性〕と地続き」（上野・湯山, 2012, p. 83 [湯山玲子の発言]）と、そして2020年代に入っても「女性を『資本主義の外』に置き、そこに理想化された社会の可能性を観る論」（江原, 2021, p. 33）などと一面的・断片的にのみ理解（誤解）されてしまっている。

桜井（1990）は、〈青木・上野論争〉では“上野派”は「エコ・フェミを否定しながら、それにとって代わる理論を何一つとして提示していない」（p. 121）と述べる。なるほど、代替理論は提示していないのかも知れないが、2024年の学問的地平から振り返ると実は同論争は理論的に幾重にも捻れた論争であった。次章ではその捻れを5つの争点に集約し、争点毎に総括していきたい。

第4章 〈青木・上野論争〉の提示した5つの争点

本章では、80年代日本のエコフェミニズム論争である〈青木・上野論争〉が提示した5つの争点を現在の学問的地平から解きほぐしていきたい。筆者が析出した5つの争点とは次のものである。

- ①【争点1：性差最大化論 vs. 性差最小化論——差異か平等か？】
- ②【争点2：母性主義 vs. 反母性主義——〈母性〉をめぐる「歴史的な論争」】
- ③【争点3：本質主義 vs. 構築主義——「フェミニズムによる自然からの逃走」？ あるいは〈自然〉と〈自然〉の混同】
- ④【争点4：構造主義 vs. ポスト構造主義——構造主義的な慧眼の見落とし】
- ⑤【争点5：反近代主義 vs. 近代主義——創られた対立？】

ちなみに、最近の遠山日出也の論考（2023, p. 49）は〈青木・上野論争〉に少なからず言及しているが、それは同論争を、(1) 上野らの批判に沿った形で青木の問題点が主張され、(2) 論争の結果、青木と上野の論点には共通する点が多かったことが明らかになり、(3) 論争は抽象的次元で行われたためエコロジーに対するフェミニズムの具体的応答は論じられず、(4) 上野はエコフェミニズムがなした資本主義批判や体制批判を隠微した、とまとめる。これは争点毎にまとめたものというよりはどちらかと言うとその経緯や事実を4点にまとめたものである。

以下、5つの争点を1つ1つ見ていこう。

【争点1：性差最大化論 vs. 性差最小化論—差異か平等か？】

論争後に青木（1987b[1982]）が振り返るように、〈青木・上野論争〉の「当初の争点はまさに『性差』だった」（p. 248）。上野（1985b, p. 98）は、Maggie McFadden⁽¹⁴⁾（1983）の分類を使って、性差最大化論者 maximizer を青木に、性差最小化論者 minimizer を自ら（上野）に割り当てている。前者は性の差異を認めつつ男女間の公正を求める考え方、後者は性の差異を最小化しつつ男女間の平等を求める（論者によっては最終的に男／女の二項対立そのものを脱構築する）考え方、と言い換えてよい。瀬地山角（1995）も〈青木・上野論争〉は性に係る「差異 vs. 平等」の論争であったと位置付けている。ただし〈差異派〉であっても男女平等を志向していないという訳ではなく、繰り返しになるが「性の差異を認めつつ男女間の公正を求める」と言った方が正確である。

確かに青木（1994e[1985]）は、男／女の境界線は一般に考えられるほど明快なものではないと留保しつつも、原則は男／女の境界を肯定している（p. 193）。一方の上野（1986a）は「男にできることは女にもできるし、男にできないことは女にもできない」（p. 173）という発言に代表されるように、性差を極小化する方向性を打ち出している。この方向性の違いは、自身のフェミニズムの出自に大きく影響されていたとも考えられる。青木はあるインタビューで「私のフェミニズムは草の根の運動に初期から加わることで培われた」（Buckley, 1997, p. 17）と話しているが、アメリカでもエコフェミニストには草の根の運動家が多く、他方、マルクス主義フェミニストは性差最小化論者で学者が多かった⁽¹⁵⁾。言うまでもなく、上野はマルクス主義フェミニストで、そのキャリアはアカデミア中心である。

上野は社会学者でもあるが、同じく社会学者でフェミニストの田中和子（1985, p. 91）の言葉を借りれば、差異派の戦略は「性関与的」、平等派の戦略は「性超越的＝性差の脱中心化」と言い換えることができる。田中は別稿（1987）では、前者を男性中心主義に対抗する「女性中心化戦略」、後者を性差を最小化していく「ノン・セクシスト戦略」とラベリングしている。

しかし青木は本当に性差最大化論者だったのだろうか？ 確かに青木（2003b）は、性の差異について男性と女性の生物学的性差（セックス）は認めているが、それは本質主義ではなく、性別役割（ジェンダー）の性差を認めることが本質主義である、としている⁽¹⁶⁾。また青木（1983）は、「女性性の探求とは、けっしてフェミニズムに逆行するものではない。それは、産むものと働くものとに分裂させられた女の性アイデンティティの統合を求めながら、同時に、近代の欺瞞と産業社会の矛盾を明るみに出そうとするものである。その意味では、現状の社会的枠組みの中で男女の『完全平等』を求める女性解放運動よりも、ラディカルな地平をめざしている」（p. 244）と理解している。加えて

青木 (1990, p. 23) は平等派フェミニズムに対する懸念も表明している。近代主義フェミニズムは男女平等を主張してきたが、身体的差異を消去することにより、男女間の身体的差異のみならず、健全者と障害者⁽¹⁷⁾、壮年者と高齢者、そして個々人の身体的差異も無視することになる、と説く。

他方、青木は、1984年の時点ですでに「男と女がどちらも生き生きと生きられるかたちというのは、男の仕事と女の仕事をなんらかの形で再分割する方向にではなく、[中略] 日常的な男女の仕事の相互乗り入れを可能にすることのほうに、むしろあるのではないかと、私は思っています」(玉野井他, 1984, p. 234 [青木の発言]) と、イリイチの思想とは相容れないような、前段落で引用した自身の発言とはブレるような発言をしているし、上述のように男/女の境界線は一般に考えられるほど明快なものではないと留保しており、性差最大化論者と一括りにしてしまうことは躊躇^{ためら}われてしまう。青木は、1982年に発表した著書『性差の文化—比較論の試み』(1987b[1982])の第四刷の「追記」(青木, 1987c)で、もともと青木は同書のタイトルとして『文化としての性差』を考えていたが、長すぎて座りが悪いということで『性差の文化』となった。このため、「『性差』の文化は人類に固有のものであり、これを伝統として保持すべきだ」(p. 249) 「文化的な『性差』を支持し、ひいては現代の『性別役割分業』を肯定している」(p. 248) と性差最大化論者と誤解されてしまった可能性を振り返っている。

〈青木・上野論争〉後、両者はお互いに誤解があったことを認めつつ、「いわゆる『上野・青木論争』の争点もまた、その本質は世に言われるような『性差』にあるのではなく」[く][中略] その点については当事者間で誤解がとけている」(青木, 1994a[1986], p. 302) と青木は報告している。論争の本質的な争点の1つは間違いなく〈性差〉だったと筆者個人は考えているが、後述するように〈性差〉以外にも多くの争点をめぐる論争でもあった。

Nancy Fraser (1997[1990], pp. 259-260) は Denise Riley (1988) に依拠しながら、「女性中心・母性主義的本質主義」は女性を過大に女性化しており、女性を母性的存在と規定する一方で、「ポストフェミニズム的反本質主義」は女性を過小に女性化しており、〈女〉は存在しないと主張している、と定義する。そして、この2つを接合しても、いずれもが有する限界を乗り越えることにはならないと喝破する。また前者を構造主義的モデル、後者を構造主義を抽象的に否定するもの、と位置付ける。江原 (1985, p. 85) の見解も Fraser に近く、「差異か平等か」を問うこと自体が「二重拘束的 double bind な問い」とする。どちらを答えても女性には不利益が予想されるからである。江原 (1985, pp. 96-97) は、「差異か平等か」を問うのではなく、非対称な〈男〉〈女〉のカテゴリー使用そのものの不当性を明確にする必要があると唱える。

Fraser の言う女性中心・母性主義的本質主義＝構造主義的モデルは青木の考えに近く、ポストフェミニズム的反本質主義＝構造主義の抽象的否定(≒ポスト構造主義)は

上野の考えに近いと考えられる。そこで以下、争点 2 では「母性主義」とそれに対置される「反母性主義」という論点を、争点 3 では「本質主義」とそれに対置される「反本質主義」（≒構築主義）という論点を、争点 4 では「構造主義」とそれに対置される「ポスト構造主義」という論点を、それぞれ確認してみたい。

【争点 2：母性主義 vs. 反母性主義——〈母性〉をめぐる「歴史的な論争」】

〈青木・上野論争〉における 2 つ目の争点は〈母性〉をめぐる論議であった。論争を通じて青木は〈母性主義者〉として、上野は〈反母性主義者〉として位置付けられた。青木（1985, p. 31）自身は上述の 1985 年 5 月のシンポジウムの講演で、宇宙論的雌雄性というものを措定し、その象徴レベルにあるものが父性原理／母性原理、そしてそれが現実社会に投影されたものが男性原理／女性原理だとし、したがって女性原理＝母性ではなく、また男女ともに女性原理を持ちうる、と説明する。母性と父性をめぐる河合隼雄との対談の中でも青木は、『母性』原理と『女性』原理というのも一度はっきり区分けをしておきたい」（河合・青木, 1986, p. 27）と述べて〈母性原理〉と〈女性原理〉とは異なるものと認識している。しかし〈青木・上野論争〉の中で青木流エコフェミニズムは〈女性原理的〉ではなく〈母性原理的〉なもの、と誤解されてしまった向きがある。大越愛子はその責任は上野にあるとし、「上野は〔中略〕母性主義とエコ・フェミニズムとを短絡的に結び付ける畏へと誘導し」（大越, 1996a[1994], p. 257）、その結果、青木流エコフェミニズムは「青木氏の意図を超えて女性原理＝母性原理という読みかえがなされ、新たな母性主義フェミニズムの温床になる可能性」（大越, 1991, p. 93）が問題視されるようになったとする。

〈3.11〉の 1 年後にインタビューを受けた上野（上野・千田・白川・丹波, 2012）は、自身の選択によるエコフェミニズム批判を悔いている。上野はエコフェミニズム批判に向かった理由として、エコフェミニズムの流れを汲むと上野がみなす当時の女性（＝母親）たちによる反原発運動に言及しつつ、〈母性〉に対する反発、つまり『お母さん』という女性の本質化に対する反発」（p. 29）があったと振り返る。また当時、上野は自身が造語した女性同士のネットワークを示す「女縁」（上野, 2008[1988]）の研究をしており、女性が（反原発運動などのために）出歩くのに「子どものため」となぜ母親役割を前面に押し出さないといけないのか（＝つまり自らのために自由に外出して女縁を結べない）を疑問視していたことも挙げている。前者の反原発運動については、上野は 2015 年の北田暁大との対話の中でも言及している。

八〇年代に私は、青木やよひさんらの「エコ・フェミニズム」と袂をわかったという個人史がある〔中略〕

私の周囲には、「エコ・フェミ」がたくさんいましたし、一九八六年のチェルノブ

イリ事故に衝撃を受けて、反原発デモや、愛媛県の伊方原発三号機建設に反対して現地集会を呼びかけるひとたちも、身近にいました。[中略]

集会に行くと集まっているのは女性が大半で、そこでは「お母さん」という呼びかけが圧倒的です。母性主義そのものです。私は、母親ではない女は、ここに存在しないのかと反発しました。(北田・上野, 2018[2015], pp. 72-73)

アネグレート・シュトプチュク (1989[1986], p. 197) は、ドイツの女性運動の中で〈母親〉〈母性〉というものから距離を置いてきたのはマルクス主義的左翼の女性だったと述べるが、この観察はマルクス主義フェミニストを標榜する上野にも当てはまっている。なお、〈母性〉は古代昔から存在する概念だと誤解されがちだが、加納実紀代 (1995) によるとその起源はヨーロッパでは 18~19 世紀で国民国家の成立と共に誕生、日本では 20 世紀初頭とされ、〈母性〉というシンボル (象徴) は 2 つの大戦下で日独伊のファシズム国家のみならず、それ以外の国家でも動員・利用されてきた。

上野と同様にマルクス主義フェミニストの久場嬉子 (1986, p. 98) は、マルクス主義フェミニズムは、女性の自然性 (身体性) の解放、哺育や老死といった人間の自然性、生態系と矛盾しない労働や技術のシステムの構築といった点から〈エコロジー〉——「女性の自然性 (身体性)」に言及していることから〈エコフェミニズム〉と言い換えてもよい——と共闘できる、とする。清水和子 (1986) もエコフェミニズムはマルクス主義フェミニズムを脱構築する可能性があるとする (p. 103) 一方で、エコフェミニズムが全体性を獲得するためには資本主義構造を狙い撃ちに、下部構造への真剣な批判——「マルクス主義、またはマルクス主義フェミニズムと同様に」と補足してよいだろう——を深める必要性を説く (p. 109)。

Sherilyn MacGregor (2006, pp. 20-21) は〈女性の母親的・ケア的素因〉と〈自然をケアする女性独自の性向〉を明示的に接続する思想を〈環境母性主義 ecomaternalism〉と名付けて〈エコフェミニズム〉と区別するが、現在の学術的地平から振り返ると、〈青木・上野論争〉で上野が叩きたかったのは〈環境母性主義〉の方で〈エコフェミニズム〉ではなかったのかも知れない。なお、〈母性主義〉は本質主義だとしてフェミニズムでは往々にして否定されてきたが、西川祐子 (1985) は均衡の取れた見方を提示し、〈母性主義〉は対抗思想としての産業社会批判 (青木は産業社会批判を展開した) においても、またその真逆の全体主義においても、言説資源として使用され得ると述べる。〈母性〉言説は、〈自然〉言説とともに戦争協力でも利用されてきた (pp. 180-181)。

なお上野 (上野・千田・白川・丹波, 2012, pp. 30-31) は、〈母性〉の本質化は、ジュディス・バトラーのような 1990 年代の脱構築派の登場により理論的には敗北し言説資源としては理論的には使えなくなったが、戦略的本質主義としては〈母性〉は文化資源として大きな動員力を依然として有しており男性にも受け入れやすい、と述べている。

この場合の〈母性〉の戦略的本質主義を、元橋利恵（2021）だったら〈戦略的母性主義〉と言うだろう。元橋は〈戦略的母性主義〉を「男性中心主義やジェンダーの権力構造への対抗のために、母親たちの経験や実践に政治的可能性を見出し、母親の政治的なエンパワメントを重視する視座」（p. 40）と定義し、積極的な意味を見出している。もちろん、上野（1986d, p. 130）も認識するように、〈母性〉は生物学的に母親になった女性の独占物ではなく、子を持たない女性、男性も持ちうる特性である。

高群逸枝の評伝（西川, 1990[1982]）を書いた西川祐子は、〈青木・上野論争〉を「女性主義（青木）vs. 新女権主義（上野）」と位置付けていた（上野, 1990, p. 277）。この「女性主義」「新女権主義」といった分類は高群逸枝の著作『恋愛創生』（1967[1926]）に由来する。高群の分類に基づき西川（1985, pp. 174-176）は戦前の母性保護論争を総括し、母性保護を提唱した平塚らいてうは「女性主義」、それに対して女性の職業的独立を提唱した与謝野晶子は「女権主義」、両者の対立を超えて社会主義女性解放戦略を提唱した山川菊枝は「新女権主義」、そして平塚の思想を引き継ぎつつ全ての階級を代弁する立場を示したのが高群逸枝の「新女性主義」とする。山下悦子（1986b）も青木の主張を「いかに平塚、高群のそれと通底するものであるかは自明」（p. 157）とし、（新）女性主義に通底する思想と位置付ける。

その山下（1991[1990]）は、〈青木・上野論争〉自体を「母性主義（青木）vs. 女権主義（上野）」と図式化し、西川とは異なり、上野を新女権主義（山川）ではなく女権主義（与謝野）として位置付ける。これは、西川は上野をそのマルクス主義（社会主義）的思想の側面から、山下は「資本主義の流れに沿った」（山下, 1991[1990], p. 51）と山下が見做す上野をその女性の独立・権利の主張の観点から観ていたため、と推察できる。青木のパートナーであった北沢方邦も山下と同じ位置付けをしていた。

大正時代、平塚らいてうと与謝野晶子とのあいだで繰り広げられた「母性保護論争」がわが国の女性近代史に残る著名な論争とされてきたが、¹⁸⁾1985年に展開された青木やよひと上野千鶴子氏との「フェミニズム論争」は、それと匹敵する、あるいはそれを超える歴史的な論争となったといえるであろう。（北沢, n.d.b）

筆者も同様に、〈青木・上野論争〉は日本のフェミニズム史における1つの大きな歴史的論争であると考えているが、現在に至るまで日本のフェミニズム史では過小評価されるか⁽¹⁸⁾、あるいはエコフェミニズムが否定された論争としてのみ記録／記憶されている。その意味で本稿は、同論争を歴史的論争として再定位する試みとも言えよう。

一方、上野（1986d, pp. 119-120）は、〈母性主義フェミニスト〉と〈個人主義フェミニスト〉とを対置させている。両者の間の対立は常にあったし、今後も続いていく、と述べ、前者の代表的論者が平塚らいてう、後者の代表的論者を与謝野晶子と位置付ける。

上野 (1985a, p. 77) は既述の 1985 年 5 月のシンポジウムで、性差、文化差、人種差、国籍差よりも個人差の方が大きく、目指すところは個人間の差異の共存であり、その差異を性に還元されたくない、と明言している。あるインタビュー (Buckley, 1997) でも上野は、〈青木・上野論争〉を振り返りつつ、女性が母性 (出産) 機能や〈母親〉に還元されることの危険性を感じていたため「個人主義的フェミニストに近いポジションを取った」(p. 281) と話す。この発言に基づけば、「母性主義 (青木) vs. 個人主義 (上野)」という図式が成り立つ。青木 (1990) は母性主義を「女性を個性と人格をそなえた一個の人間と見るよりも、“母”という特性においてのみ評価しようとする傾向」(p. 26) と定義し個人主義への支持と母性主義の否定を匂わせているし、論争を振り返って青木は「“イリイチ派フェミニスト”“母性主義者”などのラベルを貼られた」(青木, 2003b, p. 54) と述べて母性主義者ではなかったこと示唆しており、やはり青木が母性主義者とみなされたのは誤りであった、あるいは少なくとも青木の意図からは逸脱していた。

ただし落合恵美子 (1987, p. 245) は、男女の間に本質的な〈性差〉を認めた上で男性性を文化=近代、女性性を自然=反近代に対応させ、後者が前者を批判すれば「母性主義」になると述べる。青木は留保しながらも〈性差〉を認め、女性性=女性原理を提唱し、争点 5 で述べるように反近代主義=反産業主義者であり、男性性で塗り固められたとする〈近代〉を批判した。この意味で「母性主義者」と同定されてしまったのは、青木にとっては不本意であったが、落合の図式・ロジックに沿うと、少なくとも同定してしまった者たちの思考回路の中においては仕方のなかったことだったのかも知れない。

【争点 3: 本質主義 vs. 構築主義——「フェミニズムによる自然からの逃走」？あるいは〈自然〉と〈自然〉の混同】

現在の学術的地平から振り返れば、同論争は「本質主義 (青木) vs. 構築主義 (上野)」という図式でも捉えられる (森田, 2022c, p. 70)。後者の「構築主義」は「反本質主義」と言い換えてもよく、上野の言葉を借りれば『『女性本質主義』が最終的に解体するバトラーなどの脱構築』(上野・千田・白川・丹波, 2012, p. 29) と言ってもよい。構築され得るもの・されたものは脱構築されるからである。坂本佳鶴恵 (2005b[2000], p. 308) は、従来のフェミニズムは普遍的な女/男の差異を前提とし、他方、ポストモダン・フェミニズムの反本質主義は固定的・浸透的・全面的・一貫的・二項対立的な女/男のカテゴリーの構築性を問題化すると腑分けするが、前者は〈本質主義〉と、後者は〈反本質主義=構築主義=脱構築〉と換言してよいだろう。

学術界では長きに渡って構築主義が優勢な時代が続いているが、丸山正次 (2006) はカルチュラル・エコフェミニズム=本質主義的エコフェミニズムが批判されていることについて——青木流エコフェミニズムはカルチュラル・エコフェミニズム流だったと言

える——、「自然的なものを認めることと、それが固定的で変わることがなく、決定論的に確定的なものだと見ることは、本来別の事柄である」(pp. 239-240)と述べる。また丸山が参照する Diana Fuss (1989) も「〈自然〉は本質的に本質主義で、〈社会〉は本質的に構築主義であると想定する根拠はまったくない」(p. 6)と述べて本質主義／構築主義の二項対立を否定し、「社会構築主義は単に社会学的本質主義の一形態に過ぎないものとして正体を現し得る」(p. 6)と喝破する。

上述したように、〈3.11〉の1年後のインタビューで上野(上野・千田・白川・丹波, 2012)は、〈青木・上野論争〉でエコフェミニズムを批判した理由として〈母性〉に対する反発、つまり『お母さん』という女性の本質化に対する反発(p. 29)があったと振り返る。2000年代に入って『構築主義とは何か』(2001)という書を編んでいる上野の本質主義の忌避は、上野のマルクス主義フェミニストという出自——社会主義・唯物論派の(エコ)フェミニストは構築主義アプローチを取る(Mellor, 1997, p. 46)——に加え、現在の学術的地平からすると、アメリカを代表するエコフェミニストの1人 Stacy Alaimo (2016, p. 533)によるラベリングを借りて「フェミニズムによる自然から逃走 feminist flights from nature」だったと名付けることができる。シモーヌ・ド・ボーヴォワール、ジュリエット・ミッチェル、モニック・ウィティッグといったフェミニストやポスト構造主義フェミニストたちは、〈自然〉からの逃走こそが女性の解放につながると主張してきた。しかし Alaimo によると、この「フェミニズムによる自然からの逃走」は次の3つの意図せざる効果を持っていた。1点目は、〈自然〉という概念は完膚なきまでに脱構築する必要があるが、フェミニズムは〈自然〉から逃走してしまったがために、自然／文化の二項対立が生き延びる結果となってしまったこと⁽¹⁹⁾。2点目は、フェミニストでありかつ環境主義者でもある人々にとって、人間外存在に対する支配に依存したままでの女性解放は拒否すべきものであること。そして3点目は、気候変動、大量絶滅、遺伝子操作、汚染といった21世紀の〈人新世〉の地平からすると、文化＝人間活動から完全に切り離された〈自然〉という概念は考えられないこと、以上の3点である。また Alaimo は別の著作(2000)で、「自然はまた常にフェミニズム的可能性の空間であった」(p. 23)とも述べている。

上野の「自然からの逃走」は、上野が専門とするディシプリンが社会学であることも一因かも知れない。プリンストン大学で社会学を自家薬籠中の物にした鶴見和子は、在学中に「社会学というのは、社会のなかで社会の社会的事実を説明しなくてはいけないので、その人の遺伝とか、自然環境による影響とかによって社会的事実を説明することではないのだ、と非常に強く叩きこまれた」(中村・鶴見, 2002, p. 103)と話している。上野のマルクス主義フェミニズム的・構築主義的・ポスト構造主義的発想に加えて、このような出自としての社会学の訓練の影響が上野を〈自然〉から逃走させることになった可能性もある。

〈自然化〉は〈本質主義〉と同義語として使われる。〈自然〉には複数の意味があり、トリッキーである。柳父章（1982[1977]）によると日本語の〈自然〉には2つの意味がある。1つは近代以前から長い歴史を持つ仏教用語の「自然」（＝自ずから然り≡当然）の意味、もう1つは近代以降に登場した“nature”の翻訳語としての「自然」（＝自然環境）の意味である。現状はこれら2つの意味が混在し「ことばの使用者にとって分かりにくくなっている」（p. 128）。東方沙由里（2018）の指摘によると、〈青木・上野論争〉では〈自然〉が指し示す二重の意味が議論の中で混同されてしまっており、青木は〈自然〉（＝自然環境）を擁護しようとしたが、上野が叩こうとしたのは〈自然〉（＝自ずから然り≡当然＝本質主義）の方であった（p. 34）。加えて青木は、エコロジーの意味を「〈外なる自然〉＝自然環境」の意味と「〈内なる自然〉＝（女性の）身体」の両方の意味で使用しており、また山下（1986a）によると青木の「自然」は「西欧的な『自然』」（p. 6）を指していたと考えられ、このような意味の多層性と重層性もエコフェミニズム論争ですれ違いと誤解を生んだ要因と考えられる。

本質主義が構築主義によって否定された後、本質主義を見直す動きが出ている。この〈本質主義〉は、構築主義＝反-本質主義を経た後の〈本質主義〉という意味で〈反-反本質主義〉（Clifford, 2003[2000]）と言ってもよいだろう。Bonnie Mann（2006, p. 13）は、〈本質主義〉という語には規律的機能があり、「それは本質主義である！」という発言は遂行的言語行為 *performative speech act* となり、思考停止を導き、配慮の行き届いた学問研究への道を閉ざしてしまう傾向にあると主張する。また構築主義に潜む家父長制のバイアスも指摘されている（渡久山・渡久山, 2013, p. 173）。〈青木・上野論争〉で本質主義として否定されてしまった〈母性〉や〈自然〉については、〈本質主義〉として一刀両断にするのではなく、微細に考察する必要性が示唆される。

【争点4：構築主義 vs. ポスト構築主義——構築主義的な慧眼の見落とし】

上述したように、青木は男性原理／女性原理という図式を立て、留保しながらも男性／女性の二項対立を維持したという意味で構築主義的であり、上野はその二項対立を脱構築し差異を最小化しようとした意味でポスト構築主義的と言ってよい。青木（1978）は『男らしさ』の文化だけで発展してきたこの『文明社会』のゆがみ、つまり人間の心の荒廃や環境破壊を生み出した社会の構造的基盤が〔中略〕私の女性解放理論の今も変わらぬ根拠となっている」（p. 88）と述べ、ここからも〔男らしさ：女らしさ：：環境破壊：脱環境破壊〕（＝男らしさと女らしさとの関係は環境破壊と脱環境破壊との関係と等しい、と読む）という構築主義的図式が見えてくる。足立真理子（1986, p. 114）が論じるように、本来であれば青木が支持したエコフェミニズムはヨーロッパ形而上学や構築主義を含む近代主義思想総体に対する男性中心主義批判であるべきであるが、いずれにしても〈青木・上野論争〉は「構築主義（青木） vs. ポスト構築主義（上野）」の

対立だったと捉え直すことができる。

Gaard (2011, p. 31) によると、日本同様、アメリカでもポスト構造主義的フェミニズムは、第2章で概説したような多様性を無視する形で多様なエコフェミニズムを十把一絡げにしつつ〈本質主義〉だとみなした。しかし Gaard が依拠する Charis Thompson (2006) が言うように、「ポスト構造主義フェミニズムは、エコフェミニズムがもたらした構造主義的な慧眼、つまり環境破壊と女性抑圧という社会の傾向を連結させるという慧眼をどういうわけか見落としていた」(p. 511) のである。

蛇足だが、上野はある論文 (2021) で、「脱構造主義＝社会構築主義」(p. 258) とみなしている。この「脱構造主義」が「ポスト構造主義」を指しているのであれば、本争点4は争点3とも深く絡み合ってくる。

屋上屋を重ねれば、上述の Gaard が示すような日米間の類似性を目の当たりにすると、〈青木・上野論争〉は「特殊日本的」(山下, 1991[1990], p. 51) と称されたが、世界の同時代的な現象の日本版“亜種”に過ぎなかったようにも思えてくる。

【争点5：反近代主義 vs. 近代主義——創られた対立？】

桜井 (1990) がまとめるように、〈青木・上野論争〉のもう1つの主要な争点は「反近代主義 (青木) vs. 近代主義 (上野)」であった。江原由美子 (1985, pp. 52-53) は、平塚らいてうと与謝野晶子の対立も〈青木・上野論争〉も共に「反近代主義 vs. 近代主義」をめぐる対立だった、と位置付けている。坂本 (2005a[1992])、瀬地山 (1994)、山下 (1991[1990]) も同じく「反近代主義 (青木) vs. 近代主義 (上野)」と図式化する。青木 (1994d[1986]) 自身の言葉を借りればそれは「反産業主義 (青木) vs. 近代主義・近代化の徹底 (上野)」となる。福永 (2016) は「前近代主義 (青木) vs. 近代主義 (上野)」としている。坂本 (2005a[1992], p. 269) の総括によると、〈青木・上野論争〉によって反近代主義／近代主義の (二項対立的) 立場の選択という問題設定が示され、それ以降、フェミニストは〈近代〉を意識して語ることを求められるようになったという。

総じて上野は近代主義者とみなされた感がある。北沢 (n.d.a) も上野のフェミニズムを「近代フェミニズム」と名付けている。争点2の終盤で言及したように、上野は〈青木・上野論争〉において個人主義フェミニストの立場を取った。上野が依拠する〈個人〉という概念は〈近代〉が生み出した概念の1つである。上述の1985年5月のシンポジウムで上野は以下のように告白している。

実は何を隠そう私は近代主義者なんです。ただし、私は近代主義なんだけれども近代主義を通過したあとのポスト・モダン・フェミニストであって、アンチモダニストじゃない、反近代主義者じゃないってということなんです。 (日本女性学研究会一九八五年五月シンポジウム企画集団, 1985, p. 119)

同様に、イリイチと“直接対決”した既述の1985年10月のシンポジウム「女は世界をどう変えるか」で上野（1986c）は、講演の最後で、フェミニズムは近代思想から誕生した、遅れて来た近代主義的思想ではあるが、ゴールは「近代産業社会を通過した上で、この社会のわく組みをつくりかえること、これがフェミニズムの課題であり目標です」（p. 107）と述べ、脱近代主義＝超近代主義が上野の目指すフェミニズムの目標であることを明言している。桜井（1990）も、「上野は近代主義ではありながらも、そこからズレることによって、脱近代を志向している。その志向の仕方が、青木の反近代主義とは異なるということだ」（p. 134）、と結論付ける。

前段落の引用内で上野は、ポスト・モダン・フェミニスト（脱近代主義フェミニスト）は反近代主義者ではない、と述べているが、反近代主義者は「近代に反する主義を持つ者」として“後ろ向きの backward-looking”前近代主義者でもあり得るし、“前向きの forward-looking”脱近代主義者でもあり得る。青木の論考を読んでいると、彼女の反産業主義＝反近代主義は脱近代主義のことを指しているように解され、実際に青木も「エコロジカル・フェミニズム [中略] は、女性がこれまで担ってきた生活者としての感覚と、マイナス記号化されていたみずからの女性性を、プラスに転換 [し] [中略]、より少なく働き少なく消費しながら脱産業社会的な別の豊かさを実現しようとするものである」（青木, 1984, p. 4 [強調引用者]）と言明している。したがって「反近代主義 vs. 近代主義」の枠組みにはめ込まれた青木と上野は実は同じ方向、つまり〈脱近代〉を向いていた可能性が高い。それは1985年5月のシンポジウムの様子をまとめた落合の次の発言「何を憤りどんな世の中を作りたいのかというイメージは [青木も上野も] 意外なほど共有していることだった」（落合, 1987, p. 234）からも窺える。

山下（1991[1990]）は〈青木・上野論争〉を「産業社会に批判的（青木） vs. 資本主義（上野）」と図式化し、他の論者とは異なり、マルクス主義フェミニストとして知られる上野に〈資本主義〉という言葉を当てているのは興味深い。山下はその理由を次のように説明する。「『上野千鶴子』のイリイチ批判やエコロジー・フェミニズム批判は、『特殊日本的』と言いながら歴史的な実証や検証を行なつての批判ではなく、社会学のタームで客観主義的に撫で斬りしているだけで、必ずしも理論水準の高いものではないが、資本主義の流れに沿った女権主義の立場に立っていたがゆえの『追い風』の強みで、あたかも論争に勝利したような印象を与えたのだった」（p. 51）と分析している。「エコロジー・フェミニズム」と言い方はなく、また上野は論争においてどちらかという（フェミニスト）人類学のタームを使っており、その点では正確さに欠けるが、上野を資本主義者と位置付けるという意味では説明は取り敢えずはロジカルである。大越愛子（1996b, p. 139）も、青木流エコフェミニズムは自然破壊のみならず先進工業国による第三世界の生活破壊への批判という側面も有していたが、〈青木・上野論争〉の結果、

日本のフェミニズムはこれらの側面、つまり資本主義体制批判に無関心となり、バブル期を迎えた日本の資本主義の中での女性戦略を追求する一国フェミニズムへと自閉・退行していったと分析しており、山下の〈上野＝資本主義者〉説を間接的に支持する。

坂本（2005a[1992]）はメタレベルで〈青木・上野論争＝反近代主義 vs. 近代主義〉の構図を振り返り、同論争を通じて問題化すべきだったのは「フェミニズムが近代主義か反近代主義かといったことではなく、フェミニズムは『近代』を論じなければならないか、もし論じなければならないとしたら、どのような『近代』を、なぜ、論じなければならないのか、という問題だったのではないだろうか」（p. 251）と問いかける。しかし論争では「『近代』とはいったい何なのか、という根本的な問題を論じずに、いきなり『近代』について論じようとしたこと」（p. 290）で、フェミニズムが本来解決すべきであった、性差が引き起こす多くの社会問題を飛び越えて社会全体を論じる状況をつくってしまったと考察する。

江原（1985）は坂本よりもさらにラディカルである。「反近代主義 vs. 近代主義」の対立はそれ自体が近代社会で構築された対立であり、「近代主義と反近代主義の双方の言説を、ともに女性に即して解体しつくしていくことこそ、今の女性解放論の課題である」（p. 57）と喝破する。江原にとって「近代主義と反近代主義の対立軸は、女性にとって一方が戦略的でとりあえずのものであり、他方が本質的なことであるなどという一応の整理づけは何の解決でもない」（p. 57 [強調原文]）のである。

青木は、〈青木・上野論争〉において「反近代主義者」でかつ「母性主義者」とみなされたが、落合（1987）によると「母性主義」は実は「『近代主義』の補完物」（p. 258）であった。上述のように青木は母性主義者であることを否定していたが、もし母性主義者だったとしても落合の言説に基づけば近代主義者であることと等しくなり、青木が主張する反近代主義とは矛盾してしまう。またこのロジックに基づくと、近代主義者とみなされた上野は、上野が批判した母性主義者になってしまう。

他方、〈性差〉を強調しない上野流の〈平等〉の考え方は〈近代〉を超えた〈脱近代主義フェミニズム〉だったとも言える（落合, 1987, p. 253）。宮迫千鶴（1985）は〈青木・上野論争〉を「性的『現代』からの脱出（青木） vs. 性的『近代』の脱構築（上野）」と位置付けているが、もし青木と上野の脱出・脱構築＝脱近代主義の戦略に違いがあるとすれば、青木は〈近代〉からの文字通り〈脱出〉を目指した一方で、上野は近代を脱構築しながら／したうえでの脱近代を目指していたのかも知れない。

以上のように、「争点 5：反近代主義 vs. 近代主義」も、他の争点と同様に、幾重にも捻れた争点だったのである。

第5章 おわりに

本稿では、〈青木・上野論争〉から約40年経った現在の学術的地平から同論争を総括

し、その纏れた糸を解きほぐし、5つの争点をめぐる論争として改めて総括することを試みた。繰り返しになるが、その5つの争点とは以下であった。

- ①【争点1：性差最大化論 vs. 性差最小化論】
- ②【争点2：母性主義 vs. 反母性主義】
- ③【争点3：本質主義 vs. 構築主義】
- ④【争点4：構造主義 vs. ポスト構造主義】
- ⑤【争点5：反近代主義 vs. 近代主義】

子連れ出勤の是非を問うた1987～88年のアグネス論争にも参戦した上野(1988[1988])は、子連れ出勤をするアグネスを擁護する小論の結論で「女による女の『子連れ出勤』批判を、高みの見物して喜んでいるのはいったいどれであろうか」(p. 31)と、論争は男性によって仕掛けられたものだと暗に批判する。〈青木・上野論争〉も、振り返ってみると、実はメタレベルではイリイチやイリイチ派男性知識人によって(意識的あるいは無意識的に)仕掛けられたものだった、と再解釈できるのかも知れない。Robin Lakoff(1983)の「イリイチは女性を女性に、男性を女性に、敵対させる」(p. 18)という言葉を引きながら、「それこそ私たちがもっとも避けなければならないこと」(上野, 1985b, p. 90)と上野は認識していたにも関わらず、である。

〈青木・上野論争〉の結果、「フェミニズムがどのようにエコロジーにかかわっていかばいいのか、その回路まで閉じられ」(千田, 2009, p. 108)しまったのは残念なことであった。この意味で、日本とエコフェミニズムとの出会いは不幸なものだった、と喝破した大越愛子(1991, p. 90)は正しい。また上野は〈青木・上野論争〉後、「ずいぶん後になってからだけど、私はプライベートに青木さんと和解しました」(西川・上野・荻野, 2011, p. 107)と回想するが、もしそれが本当だとしたら、渡久山・渡久山(2013)が言うように「私的な領域だけでなく、公的(学術的)な領域で和解できなかったのが非常に悔やまれる」(p. 178)。

奇しくも2024年は、〈青木・上野論争〉が勃発した1985年から約40年、またデュボンヌが1974年に〈エコフェミニズム〉を造語してから里程標となる50周年を迎える。「人間が地球の持続的な生存可能性を左右するほど強い影響力を持つようになった」(Gan et al., 2017, p. G1 [訳は森田(2018, p. 8)])〈人新世〉の今こそ⁽²⁰⁾、そして環境とジェンダーの両方の目標が盛り込まれたSDGsの時代の今こそ、〈青木・上野論争〉とエコフェミニズムの意義を再考し、それを通じて日本はエコフェミニズムと幸福な再会を果たす——〈青木・上野論争〉を超克し、社会における環境的公正とジェンダー公正を並行して求める——、そのような時が到来しているのではと確信している。

謝辞

本研究は（公財）アジア女性交流・研究フォーラム（KFAW）の客員研究員研究「日本のエコフェミニストの系譜学」の一部である。KFAW による助成がなければ本研究は不可能であった。KFAW の関係者の皆様には心より感謝の意を表したい。また大学院でエコフェミニズムを直接指導くださった萩原なつ子先生、そして織田由紀子先生、菊地栄先生、横山道史先生、喜納育江先生、金子珠理先生、近藤和子先生、森岡正博先生、加藤ダニエラ先生、Stacy Alaimo 先生は本客員研究を通じてインタビューや資料・情報・コメント提供等に応じて下さった。ここに記して感謝申し上げる。最後に、エコフェミニズムをトピックの1つとして取り上げた立教大学大学院・21世紀社会デザイン研究科での授業「環境人文学」の歴代の受講生の皆さんにも感謝したい。本稿執筆に際して彼／女らとの対話からヒントを受けた部分が少なくなかったからである。

注

(1) 上野が、自身の言葉を借りれば、1985年1月号の『現代思想』上で『『エコロジカル・フェミニズム』への批判』（上野, 1985b, p. 126）を展開し、その論文が再掲された1986年出版の『女は世界を救えるか』は「エコ・フェミニズムを掲げた人々を批判して書いた」（上野, 2013, p. 107）書籍であるとしていることから。また後述の上野と青木が直接激突した1985年5月のシンポジウムでの上野の報告タイトルにも「エコロジカル・フェミニズム批判」（1985a）とあることから。「反-エコフェミニズムを掲げていた」と過去形にしているのは、特に論争以降、上野がエコフェミニズムに対して理解を示すようになっていったため。この上野の“転向”については拙稿（森田, 2022c）を参照のこと。

(2) Gaard (2011, p. 31) はエコフェミニズムを第一波・第二波フェミニズムの人間中心主義を超える〈第三波フェミニズム〉になり損ねたフェミニズムとして位置付けている。一方、清水晶子 (2022, pp. 20-21) によると、〈第三波フェミニズム〉は人種やセクシュアリティ等をめぐる多様性・交差性と個人の自由の尊重の2つの特徴をもって定義される。後者の清水の定義の方がより一般的な〈第三波フェミニズム〉の定義と言えるだろう。

(3) 拙発表 (Morita, 2023) に対する Stacy Alaimo のコメンテーターとしてのコメント。

(4) 大城・小野 (2005) の主張も Ortner のものに近い。「身体とは、人間にとってもっとも身近でありながら、もっとも恐るべき自然だったのです。この自分自身の身体に対する恐れが、社会が身体を抑圧してきた理由です。そしてそのために、出産という自然に関わる女は、男よりも下位に置かれ続けてきたのです。[中略] 男が女を支配する

べきだという考えは、人間が自然を支配するべきだという考えを別の形で表現しただけで、実際には同じことを語っているのです」(p. 148)。「『自然を征服する文明』と『女を征服する男』が] 同じものとして語られるなら、自然の復権と女の復権も同じ形で語られるだろう。そうして、自然保護の思想とフェミニズムが結び付く」(p. 151)。

(5) エコフェミニストの Ynestra King (1983) も、自然／文化の二元論や女性の環境的感受性の社会構築性を疑問視しない Ortner を批判している。Ortner (1996) はオートナー図式の提示後から約 20 年後に、その(構造主義的な)静的な並列性よりも男性-文化、女性-自然の繋がり構築の政治性により関心が向かうようになったと告白している。

(6) 筆者は修士論文 (Morita, 2006) で、カルチュラル・エコフェミニズムとスピリチュアル・エコフェミニズムを明確に区別し、マーチャントの四類型に後者を加えて五類型として提示していた。

(7) 「親和性エコフェミニズム」の元の英語は *affinity ecofeminism* で、丸山 (2006) はそれを「類縁性エコフェミニズム」と訳している。

(8) ここでリスト化した微分化された“連字符 *hyphenated*”エコフェミニズムの各派について、田嶋陽子 (2019[1992], pp. 238-239) であれば「冠つきエコフェミニズム」と、瀬地山角 (1994) であれば「スーパーマーケット」(p. 191) と、それぞれ批判するであろう。一方、エコフェミニズムと〈交差性〉の問題に取り組む Norie Ross Singer (2020) であれば「交差(性)的エコフェミニズム *intersectional ecofeminism*」と好意的に受け止めるかも知れない。エコフェミニズムと〈交差性〉の問題・関係については森田 (2022b) を参照。

(9) 青木が最初にこの命題を提示したのは 1982 年の論考 (青木, 1982[1982]) である。

(10) この文は、後に上野著『女は世界を救えるか』に再掲された際に「イリイチに共感を寄せる一部の『女性原理』派フェミニスト」(上野, 1986e[1985], p. 118) へと修正されている。

(11) この「総攻撃」は研究誌『*Feminist Issues*』の 1983 年・第 3 巻第 1 号にまとめられている。執筆陣には著名な社会学者 Arlie Hochschild や言語学者 Robin Lakoff が含まれている。

(12) なお、都会を離れて伊豆半島の“田舎”でエコな暮らしを選んだフェミニストの宮迫千鶴は、「女性原理」(宮迫, 1989[1984], 1996; 宮迫・佐藤, 1999) の称揚・再生、「母性」(宮迫・佐藤, 1999) を模索し、「女という自然」(宮迫, 2001[2001]) を主張したという意味でエコフェミニストであったと言える。その論証については別稿を改めたい。

(13) ただ青木は、少なくとも 1989 年には東京大学で「フェミニズムとエコロジー」というゼミを担当していたようではある (杉山, 2010, p. 9)。

(14) 上野 (1985b) でも、また同論文が再掲された上野 (1986e[1985]) でも、参考文献

献では“MacFadden”と綴られているが、正確には“McFadden”である。また McFadden の発表のタイトルは正確には「Anatomy of difference: Toward a classification of European feminist theory」であったが、上記上野の 2 つの文献 (1985b, 1986e[1985]) の参考文献ではともにタイトルが「Anatomy of difference: Toward a classification of feminist theory」となっており、“European”の単語が欠けている (参照 : <https://drum.lib.umd.edu/items/2b8cbb9f-d266-48c3-b011-84951b5acdf6>)。

(15) 拙発表 (Morita, 2023) に対する Stacy Alaimo のコメンテーターとしてのコメント。

(16) ジュディス・バトラー (2018[1990]) は、セックスでさえジェンダー化されている、と喝破した。

(17) 本稿では「障害の社会モデル」に沿って「障がい」「障碍」ではなく「障害」の語を使用している。「障害の社会モデル」については例えば飯野他 (2022) を参照のこと。

(18) 日本の第二波フェミニズムを牽引してきた井上輝子 (2021) は、遺稿となった『日本のフェミニズム——150 年の人と思想』で日本のフェミニズムを第 I 期 (1868-1945)、第 II 期 (1945-1970)、第 III 期 (1970-1999)、第 IV 期 (2000-) に腑分けする。第 III 期と第 IV 期の執筆については残念ながら未完のまま鬼籍に入られたが、予定されていた「幻の目次」(pp. 12-13) を見ると、〈青木・上野論争〉やエコフェミニズムへの言及はなく、日本のフェミニズムにおいて如何に〈エコフェミニズム〉が看過されてきたのかが窺える。岩波書店出版の『新編 日本のフェミニズム』の各巻のテーマも「1 リブとフェミニズム」「2 フェミニズム理論」「3 性役割」「4 権力と労働」「5 母性」「6 セクシュアリティ」「7 表現とメディア」「8 ジェンダーと教育」「9 グローバリゼーション」「10 女性史・ジェンダー史」「11 フェミニズム文学批評」「12 男性学」と、〈エコフェミニズム〉〈環境〉の視点はない。一方、坂本佳鶴恵・加藤秀一・瀬地山角 (1993) が編んだ『フェミニズム・コレクション』の第 III 巻「理論」は「エコロジカル・フェミニズム」という章を立て、青木の論考 (1994e[1985] ; 正確には 1994e 年の増補版ではなく 1986 年の旧版からの収載) と上野の論考 (1986e[1985]) を収録している点で評価できる。また大越愛子 (1996b) の『フェミニズム入門』も、エコフェミニズムと〈青木・上野論争〉をそれぞれ独立したセクションとして取り上げており、同じく評価できる。

(19) (エコ) フェミニストのダナ・ハラウェイ (2013[2003]) は、〈自然〉と〈文化〉を接合し〈自然・文化 natureculture〉という言葉を作語しているが、これは自然／文化の二項対立を脱構築する試みの 1 つである。

(20) 近年、〈人新世フェミニズム Anthropocene feminism〉というフェミニズムが登場している。その名の通り『Anthropocene Feminism』という書を編んだ Richard

Grusin はその序論 (Grusin, 2017, pp. x-xi) で、〈人新世フェミニズム〉は「フェミニズム・クィア理論に基づき [中略] 人類こそが大変革の行為体であると宣言するような男性的・家父長的要請に対して生存の倫理を提示し [中略] あらゆる人間・人間外存在の行為者が相互繫栄という目標に向かうべき責任を主張する」ような思想、と定義している。「人新世エコフェミニズム」(Gaard, 2017) というエコフェミニズムのカテゴリーも登場している。

参考文献

- 足立真理子 (1986) . 「エコロジカル・フェミニズムの地平をさぐる」社会主義理論フォーラム (編) 『挑戦するフェミニズム』 (113-125 頁) . 新評論.
- Alaimo, S. (2000). *Undomesticated ground: Recasting nature as a feminist space*. Cornell University Press.
- Alaimo, S. (2016). Nature. In L. Dish & M. Hawkesworth (Eds.), *The Oxford handbook of feminist theory* (pp. 530-550). Oxford University Press.
- 青木やよひ (1978) . 「戦後世界史の断面⑮ ボーボワールと『第二の性』」『朝日ジャーナル』第 20 巻, 第 16 号, 84-89 頁.
- 青木やよひ (1979) . 「はじめに」E. E. マッコビィ (編著) 『性差——その起源と役割』(青木やよひ・池上千寿子・河野貴代美・深尾凱子・山口良枝・訳, 3-17 頁) . 家政教育社.
- 青木やよひ (1982) . 「性と文明——現代社会の偽善と矛盾」『女性・その性の神話』(103-122 頁) . オリジン出版センター. [原著: 1982 年]
- 青木やよひ (1983) . 「女性性と身体のエコロジー」青木やよひ (編著) 『シリーズ プラグを抜く 3 フェミニズムの宇宙』 (241-295 頁) . 新評論.
- 青木やよひ (1984) . 「フェミニズムの未来」岩波書店編集部 (編) 『WOMEN351——女たちは 21 世紀を』 (3-4 頁) . 岩波書店.
- 青木やよひ (1985) . 「—講演— フェミニズムの未来」日本女性学研究会一九八五年五月シンポジウム企画集団 (編) 『フェミニズムはどこへゆく——女性原理とエコロジー——』 (7-44 頁) . ウィメンズブックストア松香堂.
- 青木やよひ (1987a) . 「序 性差と性役割の比較文化」『性差の文化——比較論の試み』 (1-17 頁) . 金子書房. [原著: 1982 年]
- 青木やよひ (1987b) . 『性差の文化——比較論の試み』金子書房. [原著: 1982 年]
- 青木やよひ (1987c) . 「追記」『性差の文化——比較論の試み』 (247-249 頁) . 金子書房.
- 青木やよひ (1990) . 「母性主義の現在——アグネス論争から生殖革命まで」金井淑子・加納実紀代 (編著) 『女たちの視線——生きる場のフェミニズム』 (22-29 頁) . 社会

評論社.

- 青木やよひ (1994a) . 「あとがき」『フェミニズムとエコロジー』〔増補版〕 (299-303 頁) . 新評論. [原著 : 1986 年]
- 青木やよひ (1994b) . 「フェミニズムの未来——上野千鶴子氏に答える——」『フェミニズムとエコロジー』〔増補版〕 (207-236 頁) . 新評論. [原著 : 1985 年]
- 青木やよひ (1994c) . 「フェミニズムと文明観」『フェミニズムとエコロジー』〔増補版〕 (46-67 頁) . 新評論. [原著 : 1985 年]
- 青木やよひ (1994d) . 「付録 『フェミニズム』 ——上野・青木論争の真の争点は何か——」『フェミニズムとエコロジー』〔増補版〕 (292-298 頁) . 新評論. [原著 : 1986 年]
- 青木やよひ (1994e) . 「女性原理とエコロジー」『フェミニズムとエコロジー』〔増補版〕 (189-206 頁) . 新評論. [原著 : 1985 年]
- 青木やよひ (2003a) . 「エコロジカル・フェミニズムとは何か」『環』第 12 卷 (2003 年冬号) , 326-331 頁.
- 青木やよひ (2003b) . 「追悼◎イバン・イリイチ 不思議な出会い」『環』第 12 卷 (2003 年冬号) , 54 頁.
- アルツァ, C. ・バタチャーリヤ, T. ・フレイザー, N. (2020) . 『99%のためのフェミニズム宣言』 (惠愛由・訳) . 人文書院. [原著 : 2018 年]
- 馬場恭子 (1993) . 「ecofeminism (訳者解説)」H. ビアード・C. サーフ (著) 『当世アメリカ・タブー語事典』 (35 頁) . 文藝春秋.
- Barry, J. (1999). *Environment and social theory*. Routledge.
- ブクチン, M. (1996) . 『エコロジーと社会』 (藤堂麻里子・戸田清・萩原なつ子・訳) . 白水社. [原著 : 1990 年]
- ブライドッチ, R. ・チャルキエヴィッチ, E. ・ホイスラー, S. ・ワイヤリング, S. (1999) . 『グローバル・フェミニズム——女性・環境・持続可能な開発』 (寿福真美・監訳, 戸原正法・後藤浩子・平山誠・海津友子・荒井正敏・訳) . 青木書店. [原著 : 1994 年]
- Buckley, S. (1997). *Broken silence: Voices of Japanese feminism*. University California Press.
- バトラー, J. (2018) . 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』〔新装版〕 (竹村和子・訳) . 青土社. [原著 : 1990 年]
- Clifford, J. (2003). Interviewer: Manuela Ribeiro Sanches, Santa Cruz, Winter 2000. *On the edges of anthropology (Interviews)* (pp. 43-78). Prickly Paradigm Press. (Original work published 2000)
- Cuomo, C. J. (1998). *Feminism and ecological communities: An ethics of flourishing*.

Routledge.

- ドオボンヌ, F. (1983). 「エコロジーとフェミニズム」青木やよひ (編著) 『シリーズ プラグを抜く3 フェミニズムの宇宙』 (辻由美・訳, 182-189 頁). 新評論.
[原著: 1976 年]
- d'Eaubonne, F. (2000). What could an ecofeminist society be? *Ethics & the Environment*, 4(2), 179-184.
- d'Eaubonne, F. (2022). *Feminism or death* (R. Hottell & E. Ramadan, Trans.). Verso.
(Original work published 1974)
- Diamond, I., & Seidenberg, D. (1999). Sensuous minds and the possibilities of a Jewish ecofeminist practice. *Ethics & the Environment*, 4(2), 185-195.
- Eaton, H., & Lorentzen, L. A. (2003). Introduction. In H. Eaton & L. A. Lorentzen (Eds.), *Ecofeminism and globalization: Exploring culture, context, and religion* (pp. 1-7). Rowman & Littlefield.
- 江原由美子 (1985). 「女性解放論の現在」『女性解放という思想』 (2-60 頁). 勁草書房.
- 江原由美子 (1990). 「フェミニズムの 70 年代と 80 年代」江原由美子 (編著) 『フェミニズム論—70 年代から 90 年代へ』 (1-46 頁). 勁草書房.
- 江原由美子 (2021). 『増補 女性解放という思想』ちくま学芸文庫.
- Fraser, N. (1997). Structuralism or pragmatics? On discourse theory and feminist politics. *Justice interruptus: Critical reflections on the "postsocialist" condition* (pp. 238-267). Routledge. (Original work published 1990)
- 福永真弓 (2016). 「エコロジーとフェミニズム: 生 (life) への感度をめぐって」『女性学研究』第 23 巻, 1-26 頁. 大阪府立大学女性学研究センター.
- Fuss, D. (1989). *Essentially speaking: Feminism, nature & difference*. Routledge.
- Gaard, G. (1993). Living interconnections with animals and nature. In G. Gaard (Ed.), *Ecofeminism: Women, animals, nature* (pp. 1-12). Temple University Press.
- Gaard, G. (1997). Toward a queer ecofeminism. *Hypatia*, 12(1), 114-137.
- Gaard, G. (2002). Vegetarian ecofeminism: A review essay. *Frontiers: A Journal of Women Studies*, 23(3), 117-146.
- Gaard, G. (2011). Ecofeminism revisited: Rejecting essentialism and re-placing species in a material feminist environmentalism. *Feminist Formations*, 23(2) (Summer 2011), 26-53.
- Gaard, G. (2017). *Critical ecofeminism*. Lexington Books.
- Gan, E., Tsing, A., Swanson, H., & Bubandt, N. (2017). Introduction: Haunted landscapes of the Anthropocene. In A. Tsing, H. Swanson, E. Gan, & N. Bubandt

- (Eds.), *Arts of living on a damaged planet: Ghosts of the Anthropocene* (pp. G1-G14). University of Minnesota Press.
- Gifford, T. (1995). The social construction of nature. *Green voice: Understanding contemporary nature poetry* (pp. 1-25). Manchester University Press.
- Grusin, R. (2017). Introduction: Anthropocene feminism: An experiment in collaborative theorizing. In R. Grusin (Ed.), *Anthropocene feminism* (pp. vii-xix). University of Minnesota Press.
- 萩原弘子 (1988) . 「ジェンダー——コスモロジーと自律の牢獄」『解放への迷路——イヴァン・イリッチとはなにものか』 (70-100 頁) . インパクト出版会. [原著 : 1985 年]
- 萩原なつ子 (2001). 「ジェンダーの視点で捉える環境問題——エコフェミニズムの立場から」長谷川公一 (編著) 『環境運動と政策のダイナミズム』 (35-64 頁) . 有斐閣.
- 萩原なつ子 (2006). 「環境問題・開発問題における女性の不可視化と周辺化——沖縄県石垣市新石垣空港建設問題の事例から——」『国際ジェンダー学会誌』第 4 号, 33-56 頁. 国際ジェンダー学会.
- 萩原なつ子 (2007). 「環境・開発とジェンダー」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第 8 号, 101-105 頁. 立教大学ジェンダーフォーラム.
- 萩原なつ子 (2015). 「環境と女性／ジェンダー：考え方と歴史」北九州サステナビリティ研究所 (編) 『環境活動における女性・ジェンダー事例集』北九州サステナビリティ研究所.
- ハラウェイ, D. (2013). 『伴侶種宣言——犬と人の「重要な他者性」』(永野文香・訳). 以文社. [原著 : 2003 年]
- 飯野由里子・星加良司・西倉実季 (2022). 『「社会」を扱う新たなモード——「障害の社会モデル」の使い方』生活書院.
- イリイチ, I. (1984). 『ジェンダー——女と男の世界』(玉野井芳郎・訳). 岩波現代選書. [原著 : 1983 年]
- 井上輝子 (2021). 『日本のフェミニズム——150 年の人と思想』有斐閣.
- 加納実紀代 (1995). 「個人に——回収されない——自立へ 母性ファシズムの風景」加納実紀代 (編著) 『ニュー・フェミニズム・レビュー 6 母性ファシズム・母なる自然の誘惑』(30-52 頁) . 学陽書房.
- 加藤尚武 (1995). 「環境と文化——deep ecology 批判」『環境社会学研究』第 1 号, 111-115 頁. 環境社会学会.
- 河合隼雄・青木やよひ (1986) . 「『母性社会』の母性と父性」青木やよひ (編著) 『母性とは何か ●新しい知と科学の視点から』 (1-34 頁) . 金子書房.
- King, Y. (1983). Toward an ecological feminism and a feminist ecology. In J.

- Rothschild (Ed.), *Machina ex dea: Feminist perspectives on technology* (pp. 118-129). Pergamon Press.
- 北田暁大・上野千鶴子 (2018). 「政治的シニシズムの超え方——上野千鶴子との対話」北田暁大 (著) 『終わらない「失われた 20 年」——嗤う日本の「ナショナリズム」・その後』 (59-111 頁). 筑摩書房. [原著: 2015 年]
- 北沢方邦 (n.d.a). 「青木やよひの人と経歴」『知と文明のフォーラムⅡ』. 2023 年 9 月 28 日 <https://chitobunmei.com/aokiyayoi02/>より情報取得.
- 北沢方邦 (n.d.b). 「青木やよひとは？」『知と文明のフォーラムⅡ』. 2023 年 9 月 28 日 <https://chitobunmei.com/aokiyayoi/>より情報取得.
- 久場嬉子 (1986). 「マルクス主義フェミニズムとその理論的射程」社会主義理論フォーラム (編) 『挑戦するフェミニズム』 (86-100 頁). 新評論.
- Lakoff, R. (1983). Illich as text. *Feminist Issues*, 3(1), 15-19.
- MacGregor, S. (2006). *Beyond mothering earth: Ecological citizenship and the politics of care*. UBC Press.
- Mann, B. (2006). *Women's liberation and the sublime: Feminism, postmodernism, environment*. Oxford University Press.
- 丸山正次 (2006). 「エコフェミニズム」『環境政治理論』 (196-266 頁). 風行舎.
- McFadden, M. (1983, June 26-30). *Anatomy of difference: Toward a classification of European feminist theory* [Paper presentation]. NWSA '83 Conference, Columbus, OH, United States.
- Mellor, M. (1997). *Feminism & ecology*. New York University Press.
- Mellor, M. (2000). Feminism and environmental ethics: A materialist perspective. *Ethics & the Environment*, 5(1), 107-123.
- マーチャント, C. (1985). 『自然の死——科学革命と女・エコロジー』 (団まりな・訳). 工作舎. [原著: 1980 年]
- マーチャント, C. (1994). 『ラディカルエコロジー——住みよい世界を求めて』 (川本隆史・須藤自由児・水谷広・訳). 産業図書. [原著: 1992 年]
- Merchant, C. (2007). *American environmental history: An introduction*. Columbia University Press.
- 宮迫千鶴 (1984). 『《女性原理》と「写真」——来たるべき“水瓶座の時代”のために——』国文社.
- 宮迫千鶴 (1985). 「フェミニズムの地平 3 都市型社会のフェミニズム——あるいは“ゴーマン・リブ”よ さようなら」『季刊へるめす』第 3 号, 118-127 頁.
- 宮迫千鶴 (1989). 『超少女へ』集英社文庫. [原著: 1984 年]
- 宮迫千鶴 (1996). 『草と風の癒し』青土社.

- 宮迫千鶴 (2001) . 「愛子ばばから学んだ『女性という自然』」藤原書店編集部 (編) 『歴史の中のジェンダー』 (167-174 頁) . 藤原書店. [原著: 2001 年]
- 宮迫千鶴・佐藤初女 (1999) . 『「森のイスキア」で話したこと』創元社.
- Morita, K. (2006). *A post-Kyoto proposal: Engendering the Kyoto Protocol with ecofeminist perspectives* [Unpublished master's thesis]. Rikkyo University.
- 森田系太郎 (2018) . 「〈クィア〉な人新世に向けて」『文学と環境』第 21 号, 8-10 頁. ASLE-Japan / 文学・環境学会.
- 森田系太郎 (2022a.5.3) . 「エコフェミニズム序説——概論からエコフェミニスト文学批評まで」山本洋平 (司会) 『アメリカ (中/南) 西部文学におけるトランスリージョナリズムとエコフェミニズム (科研)』録画.
- 森田系太郎 (2022b) . 「〈交差性〉を脱人間中心主義化する——エコフェミニズム再考」『現代思想』第 50 巻, 第 5 号 (2022 年 5 月号), 247-259 頁.
- 森田系太郎 (2022c) . 「日本のエコフェミニズムの 40 年——第一波から第四波まで——」萩原なつ子 (監修)・萩原ゼミ博士の会 (著)・森田系太郎 (編著) 『ジェンダー研究と社会デザインの現在』(53-78 頁) . 三恵社.
- 森田系太郎 (2022d) . 「訳者解題」『現代思想』第 50 巻, 第 2 号 (2022 年 2 月号), 219-220 頁.
- Morita, K. (2023.7.27). *A genealogy of ecofeminism in Japan*. In Y. Yamamoto (Moderator), Ecofeminist Session funded by the Kitakyushu Forum on Asian Women (KFAW), online.
- 元橋利恵 (2021) . 『母性の抑圧と抵抗——ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』晃洋書房.
- 中村桂子・鶴見和子 (2002) . 『〈鶴見和子・対話まんだら〉中村桂子の巻 四十億年の私の「生命」——生命誌と内発的発展論』藤原書店.
- 中村雄二郎 (2001) . 「原理としての〈子ども〉から〈女性〉へ」『魔女ランダ考——演劇的知とはなにか』(215-280 頁) . 岩波現代文庫. [原著: 1982 年]
- 中村雄二郎・青木やよひ (1986) . 「女性原理は『近代知』を問いなおす」青木やよひ (編著) 『母性とは何か ●新しい知と科学の視点から』(35-64 頁) . 金子書房.
- 中村雄二郎・河合隼雄 (1983) . 「対話 原理としての女性」『現代思想』第 11 巻, 第 8 号 (1983 年 8 月号) , 196-217 頁.
- Nhanenge, J. (2011). *Ecofeminism: Towards integrating the concerns of women, poor people, and nature into development*. University Press of America.
- 日本女性学研究会一九八五年五月シンポジウム企画集団 (編) (1985) . 『フェミニズムはどこへゆく——女性原理とエコロジー——』ウィメンズブックストア松香堂.
- 西川祐子 (1985) . 「一つの系譜——平塚らいてう、高群逸枝、石牟礼道子」脇田晴子

- (編著) 『母性を問う (下) — 歴史的変遷』 (158-191 頁). 人文書院.
- 西川祐子 (1990) 『森の家の巫女—高群逸枝』 レグルス文庫. [原著: 1982 年]
- 西川祐子・上野千鶴子・荻野美穂 (2011). 『フェミニズムの時代を生きて』 岩波現代文庫.
- 能澤壽彦 (作成)・鶴見和子 (校閲) (1999). 「『鶴見和子研究』年譜」 『コレクション 鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻 内発的発展論によるパラダイム転換』 (363-424 頁). 藤原書店.
- 落合恵美子 (1987). 「『近代』とフェミニズム—歴史社会学的考察」 女性学研究会 (編) 『女の目で見ると』 (233-258 頁). 勁草書房.
- オコンナー, J. (1995). 「持続可能な資本主義はありうるか」 戸田清・R. エバノフ (編著) 『環境思想と社会』 (戸田清・訳, 187-193 頁). 東海大学出版会. [原著: 1991 年]
- 大越愛子 (1991). 「日本におけるフェミニズムとエコロジー」 近藤和子・鈴木裕子 (編著) 『おんな・核・エコロジー』 (87-114 頁). オリジン出版センター.
- 大越愛子 (1996a). 「フェミニズムにおける『差別』、『環境』、『アジア』」 『闘争するフェミニズムへ』 (244-266 頁). 未来社. [原著: 1994 年]
- 大越愛子 (1996b). 『フェミニズム入門』 ちくま新書.
- 大城信哉 (監修)・小野功生 (2005). 『ポスト構造主義』 ナツメ社.
- Ortner, S. B. (1974). Is female to male as nature is to culture? In M. Z. Rosaldo & L. Lamphere (Eds.), *Woman, culture, and society* (pp. 67-87). Stanford University Press.
- Ortner, S. B. (1996). So, is female to male as nature is to culture? *Making gender: The politics and erotics of culture* (pp. 173-180). Beacon Press.
- Plumwood, V. (1993). *Feminism and the mastery of nature*. Routledge.
- Power, C. (2016). *Multispecies ecofeminism: Ecofeminist flourishing of the twenty-first century* [Unpublished master's thesis]. University of Victoria.
- Riley, D. (1988). *'Am I that name?': Feminism and the category of 'women.'* University of Minnesota Press.
- 坂本佳鶴恵 (2005a). 「フェミニズムはどのように『近代』を問うべきか—『近代』主義論争のゆくえ」 『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するか』 (244-273 頁). 新曜社. [原著: 1992 年]
- 坂本佳鶴恵 (2005b). 「ポストモダン・フェミニズムの戦略—J. バトラーらの可能性」 『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するか』 (299-324 頁). 新曜社. [原著: 2000 年]
- 坂本佳鶴恵・加藤秀一・瀬地山角 (編著) (1993). 『フェミニズム・コレクション III

——理論』勁草書房.

桜井裕子 (1990). 「エコロジカル・フェミニズム論争は終わったか」江原由美子 (編著)

『フェミニズム論争——70年代から90年代へ』(121-146頁). 勁草書房.

瀬地山角 (1994). 「フェミニズムは女性のものか」庄司興吉・矢澤修次郎 (編著)『知

とモダニティの社会学』(185-206頁). 東京大学出版会.

瀬地山角 (1995). 「Overview ジェンダー研究の現状と課題」井上俊・上野千鶴子・

大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉 (編著)『岩波講座 現代社会学 第11巻 ジェンダーの社会学』(227-243頁). 岩波書店.

千田有紀 (2009). 『ヒューマニティーズ——女性学／男性学』岩波書店.

清水晶子 (2022). 『フェミニズムってなんですか?』文春新書.

清水和子 (1986). 「フェミニズムにおける近代批判 *エコロジカル・フェミニズム

の全体性へ向けて」社会主義理論フォーラム (編)『挑戦するフェミニズム』(101-112頁). 新評論.

新評論編集部 (編) (1986). 『ジェンダー・文字・身体』新評論.

Singer, N. R. (2020). Toward intersectional ecofeminist communication studies.

Communication Theory, 30, 268-289.

Starhawk (1989). Feminist, Earth-based spirituality and ecofeminism. In J. Plant

(Ed.), *Healing the wounds: The promise of ecofeminism* (pp. 174-185). New Society.

シュトプチェク, A. (1989). 「男文明から降りる——一九八二年生まれの息子ドリア

ンのために」M. ガムバロフ・M. ミース・A. シュトプチェク・C. v. ヴェールホーフ・他 (著)『チェルノブイリは女たちを変えた』(グループ GAU・訳, 178-200頁). 社会思想社. [原著: 1986年]

Strathern, M. (1980). No nature, no culture: The Hagen case. In C. P. MacCormack

& M. Strathern (Eds.), *Nature, culture and gender* (pp. 174-222). Cambridge University Press.

杉山直子 (2010). 「青木やよひさんの“NO”と“YES”」『ヴィラ・マーヤ便り (知と文明

のフォーラム ニューズレター)』(9-10頁). 2023年12月8日
<https://chitobunmei.com/wp-content/uploads/2020/04/villamaya03.pdf> より情報取得.

田嶋陽子 (2019). 『愛という名の支配』新潮社. [原著: 1992年]

高群逸枝 (1967). 「恋愛創生」『高群逸枝全集／第7巻 評論集 恋愛創生』(7-213

頁). 理論社. [原著: 1926年]

武田一博 (2005). 「エコフェミニズム」尾関周二・亀山純生・武田一博 (編著)『環

境思想キーワード』(8-9頁). 青木書店.

玉野井芳郎・青木やよひ・永畑道子・中村尚司・山本哲士・片岡陽子・伊藤るり・樺山

- 絃一 (1984) . 「〈パネル・ディスカッション〉性と労働を問う」フォーラム・人類の希望 (編) 『シリーズ プラグを抜く 民衆による平和—平和的ジェノサイドとジェンダー』 (223-243 頁) . 新評論.
- 田中和子 (1985) . 「男性性・天なる父と宇宙論的雌雄性のズレについての疑問」日本女性学研究会一九八五年五月シンポジウム企画集団 (編) 『フェミニズムはどこへゆく—女性原理とエコロジー—』 (89-91 頁) . ウィメンズブックストア松香堂.
- 田中和子 (1987) . 「フェミニスト社会学のゆくえ」女性学研究会 (編) 『女の目でみる』 (133-152 頁) . 勁草書房.
- Taylor, D. E. (1997). Women of color, environmental justice, and ecofeminism. In K. J. Warren (Ed.) & N. Erkal (editorial assistance), *Ecofeminism: Women, culture, nature* (pp. 38-81). Indiana University Press.
- Thompson, C. (2006). Back to nature?: Resurrecting ecofeminism after poststructuralist and third-wave feminisms. *Isis*, 97(3) (September 2006), 505-512.
- 戸田清 (1994) . 『環境的公正を求めて—環境破壊の構造とエリート主義』新曜社.
- 渡久山晴美・渡久山幸功 (2013) . 「エコフェミニズム再考—開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として—」『人間科学』第 29 巻, 153-187 頁. 琉球大学法文学部人間科学科紀要.
- 遠山日出也 (2023) . 「新自由主義とエコロジーへのフェミニズムとその周辺の対応について—公私の両領域の高い段階での再統一という観点からの検討」『女性学年報』第 44 巻, 40-60 頁.
- 東方沙由里 (2018) . 「日本におけるエコロジーへのケアの不在—エコフェミ論争における自然という語の検討から」『変革のアソシエ』第 32 号, 32-39 頁. 社会評論社.
- 上野千鶴子 (1985a) . 「エコロジカル・フェミニズム批判—屈折したミニマリストの立場から—」日本女性学研究会一九八五年五月シンポジウム企画集団 (編) 『フェミニズムはどこへゆく—女性原理とエコロジー—』 (68-77 頁) . ウィメンズブックストア松香堂.
- 上野千鶴子 (1985b) . 「女は世界を救えるか?—イリイチ『ジェンダー』論徹底批判」『現代思想』第 13 巻, 第 1 号, 80-104 頁.
- 上野千鶴子 (1986a) . 「あとがき」『女は世界を救えるか』 (173-177 頁) . 勁草書房.
- 上野千鶴子 (1986b) . 「ジェンダーの文化人類学」『女は世界を救えるか』 (81-115 頁) . 勁草書房. [原著: 1984 年]
- 上野千鶴子 (1986c) . 「近代産業社会を超えるものとしてのフェミニズム」朝日新聞社 (編) 『国際シンポジウム 女は世界をどう変えるか』 (98-107 頁) . 朝日新聞社.

- 上野千鶴子 (1986d) . 『女という快樂』 勁草書房.
- 上野千鶴子 (1986e) . 「女は世界を救えるか——イリイチ『ジェンダー』論徹底批判」
『女は世界を救えるか』 (117-161 頁) . 勁草書房. [原著: 1985 年]
- 上野千鶴子 (1988) . 「働く母が失ってきたもの——『子連れ出勤』のアグネスを擁護」
「アグネス論争」を愉しむ会 (編) 『「アグネス論争」を読む』 (30-31 頁) . J-CC
出版局. [原著: 1988 年]
- 上野千鶴子 (1990) . 「解説」西川祐子 (著) 『森の家の巫女——高群逸枝』 (268-278
頁) . レグルス文庫.
- 上野千鶴子 (1995) . 「オリエンタリズムとジェンダー」加納実紀代 (編著) 『ニュー・
フェミニズム・レビュー』 (108-131 頁) . 学陽書房.
- 上野千鶴子 (編著) (2001) . 『構築主義とは何か』 勁草書房.
- 上野千鶴子 (2008) . 『「女縁」を生きる女たち』 岩波現代文庫. [原著: 1988 年]
- 上野千鶴子 (2013) . 『〈おんな〉の思想——私たちは、あなたを忘れない』 集英社イ
ンターナショナル.
- 上野千鶴子 (2021) . 「当事者の社会学へ向けて」樫田美雄・小川伸彦 (編著) 『〈当
事者宣言〉の社会学——言葉とカテゴリー』 (227-261 頁) . 東信堂.
- 上野千鶴子・千田有紀 (聞き手)・白川真澄 (聞き手)・丹波博紀 (聞き手) (2012) .
「巻頭インタビュー 『不安な時代』をどう生きるか」『季刊ピープルズ・プラン』
第 59 号, 27-48 頁.
- 上野千鶴子・湯山玲子 (2012) . 『快樂上等! 3.11 以降を生きる』 幻冬舎.
- 山下悦子 (1986a) . 「連載 1 フェミニズムを超えて」『フェミテ』第 4 巻, 3-9 頁.
東京女性史研究会.
- 山下悦子 (1986b) . 「高群逸枝『母系制の研究』と本居宣長 *ポストモダンとファ
シズム」社会主義理論フォーラム (編) 『挑戦するフェミニズム』 (141-157 頁) .
新評論.
- 山下悦子 (1991) . 「『経済大国ニッポン共同体』とフェミニズム」『「女性の時代」
という神話』 (36-63 頁) . 青弓社. [原著: 1990 年]
- 柳父章 (1982) . 『翻訳語成立事情』 岩波新書. [原著: 1977 年]
- 横山道史 (2007) . 「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別——
フェミニズムとエコロジーの結節点に関する一考察——」『技術マネジメント研究』
第 6 号 (2007 年 3 月) , 21-33 頁. 横浜国立大学技術マネジメント研究学会. 2023
年 10 月 9 日
https://ynu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=5044&item_no=1&page_id=59&block_id=74 より
情報取得.

横山道史（2008）．「女性の自然化／男性の文化化—女性支配と自然支配の根源性と
布置連関—」『国際ジェンダー学会誌』第 6 号，79-100 頁．国際ジェンダー学会．

【著者紹介】森田系太郎

エコフェミニズム・環境人文学研究者、会議通訳・翻訳者。立教大学・兼任講師、KFAW（アジア女性交流・研究フォーラム）・客員研究員、立教大学 ESD（持続可能な開発のための教育）研究所・研究員、社会デザイン研究所・特別研究員、韓国 NRF（韓国研究財団）研究協力者。社会デザイン学会・理事。Rowman & Littlefield (Lexington)の書籍シリーズ *Ecocritical Theory & Practice* のアドバイザー・ボード・メンバー、研究誌 “Ecokritike” の国際アドバイザー・ボード・メンバー。

上智大学（国際関係法 [学士]）、立教大学（異文化コミュニケーション学 [修士]）、社会デザイン学 [博士]）、モントレール国際大学院（翻訳通訳学 [修士]）卒。

編著書に『環境人文学 I & II』（勉誠出版，2017）、『ジェンダー研究と社会デザインの現在』（三恵社，2022）が、共著に *East Asian Ecocriticisms: A Critical Reader* (Palgrave Macmillan, 2013)、*Routledge Handbook of Ecocriticism and Environmental Communication* (Routledge, 2019)、『通訳の仕事 始め方 続け方』（イカロス出版，2021）、*Waste and Discards in the Asia Pacific Region: Social and Cultural Perspectives* (Routledge, 2023)、論文に「〈交差性〉を脱人間中心主義化する——エコフェミニズム再考」（『現代思想』2022年5月号）など多数。